リターン・トゥ・マイライフ

あゆみかん

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
リターン・トゥ・マイライフ

【Ｎコード】
Ｎ５８１２Ｎ

【作者名】
あゆみかん

【あらすじ】
■【ＳＦ／少し恋愛／全１９話＋おまけ２話】■何度、試合に負けたっけな。もしも勝っていたなら、違う人生を歩いていけたかな――システム開発株式会社『ＭＡＧＩＴＥＣ』、通称『魔界』と呼ばれたその会社内では、あるプロジェクトが進行していた。開発中仮想化ソフト『失敗修正マイライン［ＦＣＭＬ－Ｘ］（仮）』、自分の過去での『失敗』を修正するあくまでも『ゲーム』だったが、プログラムのバグを取り除くデバッガが必要だとされ、その試験（テスト）用ソフトは、ある社員によって屋外に持ち出されていたのだった――

『魔女のハートでお届けします』◇『空想科学祭２０１０』企画参加作品第２弾。

1（帰り）／現在

何故、あの時に声をかけてしまったのだろう。あの時に。あの時に……

あの時に、声なんかかけなければと――

・・・

今年も暑い夏がやって来ていた。

丸みの雲が地平の線奥先から昇るように見えたあと、空の色に薄くなってこちら側まで、小さな綿菓子が繋がっているように続いていた。入道雲と呼ばれたそれは、のどかで田舎によく合っている。

＞i12622―1775＜

山の麓（ふもと）には沿って自然なカーブを描いた大道路、ひび割れたアスファルトからは野草が細く、葉先を枯らしながらも茎は真っ直ぐに伸びていた。人も車も気配のない静かな道を、緩やかに下っていくと見えてくるのは1時間に1本しか停車してくれない褪せてくたびれた電車の、屋根が台風でもきたら傾きそうで小じんまりとした木造の、蔦が柱や壁に絡みに絡まって通行人を隙あらば襲いかけそうなほどの……古い歴史ある駅舎だった。昔に近くで合戦があり、それのミニ展示室があるらしい。休憩所に使われていた。

柱に掛けられた温度計を見れば、太陽が一番に高く空に君臨する頃になると３５度を越えていたという。
「暑いですねえ、今朝からも」
中肉中背の駅員が、町内会でもらったらしいロゴ入りのタオルで汗を幾度も拭きながら、来る人来る人に挨拶と声をかけていた。「ええ、本当に。見て下さいな、この日焼け。１日だけでこんなに」話しかけられた日傘をさす婦人は、足のつま先を指して嫌な顔をしていた。サンダルを履いた跡が日焼けでくっきりとついている。

するとその横を無言で、少し俯き加減になりながら通過しようとした少女がいた。
猛暑のなか黒の半袖ワンピースを着、黒のメッシュ靴を履いて、目にとかかる前髪の片方を上げてピンでシンプルに留めていた。「泉ちゃん。帰りかい？」肥えた駅員は、改札で切符を通そうとする泉にのんびりと呼びかけていた。
「はい」
振り向き小さな返事をするが、愛想もなく表情の変わらない泉に駅員も傍にいた婦人も、心配そうに顔を見合わせていた。
「泉ちゃん、ひとり？」
婦人がハンカチで口を押さえて、泉を見守っている。「他のみんなは、私の後に――」最後までは、擦れて言葉が続かなかった、すると……

風が一瞬だけ。
泉の首筋に……触れていた。

（あのなかに、居たくないし）

続かない言葉の代わりにお辞儀を軽くすると泉は背を駅員たちに向け、振り向かずホームへと進んで行く。改札を抜けるとすぐ、番

線のない待つだけのホームが現れて、泉は歩きを止めずに右へと向かって行った。幸いにも屋根のある場の長椅子には、誰も座ってはいなかった。

ジーワ、ジーワ、ジーワワワ……

ギー……

裏手にはフェンス、超えるとそこは特に手をつけてはいない森林公園だった。草は自由に生え茂り、樹は根付いて枝は空に向かう。蝉の大合唱は騒音でも、何の問題にもしていない。

端から少しズレて椅子に座った泉は、流れてくる汗を手で拭いていた。

（暑い……真夏に黒服はこたえるわ……）

のぼせそうな頭を庇おうと手を上げて、まぶたの上の視界を暗くした、それでも暫く光がまぶたの裏では消えてはくれていない。残暑は厳しく、まだ中学生の泉にも容赦なく熱は襲ってくる。

（早く帰りたい……）

そう思わせるのは、暑さのせいだけではなかった。

数時間前に聞きたくもなかった友人たちの会話を、隠れて聞いてしまったためでもあった。

『見た？　相変わらず表情ないねー』

『冷たい人ね』

『そういえば知ってた？　噂だけどほら、事故現場にいたんだって。野崎さん』『嘘。何で？　だって』

『穂摘先輩と何かあったんじゃない。喧嘩したとかさぁ……』

黒白の幕の裏で、当人はいないだろうと好き勝手に囁かれる噂は、こうしてひとり歩きをしていくのだろう。だが残念なことに、通りがかった泉は耳に入ってしまっていた。

体はこれも勝手に物陰に隠れて、泉の胸中、何度でも言葉の槍は、ぐさりと突き刺さっていっていた。

『冷たい人ね』

放っておけばと、泉は反発するしかなかった。だがそれも本心では空しく、気がつけば、落ち込んでいた。

（どうせ私は……）

冷たい、と、自分でもそれが誤解なのかどうだか判らなかった。顔が崩れてくれない。だからか神経質になって気分の下る泉に手をさしのべてくれる勇者はいない、孤独の前進は、泉の言葉に棘をさしていた。

ふと、思い出す。

（雨が降ってた……）

暑さでうだる泉の脳裏には、記憶の断片が重なっていた。歩く穂摘、振り向く穂摘、濡れた穂摘、『私』を見る穂摘、それから。

飛んでいく、……穂摘。

（ちゃんと救急車呼んだわよ……）

振り返らない。泉に一滴も、涙は流れなかったという。

別れを惜しむ声や鼻をすする音が頻繁に聞こえるなか、泉は先に友人たちを置いてひとりで。

前をみようとしていたのだった。

2（既存の魔法）／現在

『魔界』と呼ばれる開発会社があった。それは通称であり、正式にはシステム開発株式会社『ＭＡＧＩＴＥＣ』とちゃんと名前がある。まじてっく、想像の通り、既存の魔法と従来の技術を駆使して新たなる開発をめざすという社長のコンセプトをそのまま表していたものだった。

ここで社員もろとも聞いた者が首を７５度くらい傾けて疑問に思えるのは、『既存の魔法』とは何ぞやということだった。雑誌のコラムで取り上げようと、好奇心旺盛な記者は代表取締役のタダナカ氏に直接取材を依頼し、回答を申し入れていた。薄暗い灰色（ディムグレー）の上下スーツに暗鮭色（ダークサーモン）のネクタイをしていた彼なのだが、紫紅色（マゼンタ）の大きなトンガリ帽を被っていた。このスタイルがここでは常時そうなのかどうなのかハテさて何でまた、全くもって不明である。

『既存の魔法』とやらを聞くはずが、質問が増えていきそうで会社に訪れた記者は内心、苦笑いだった。応接室に通されたまだ若い女性記者は、牛革製のソファにと腰掛けた。連続高密度鋼製バネ（ＧＲスプリング）を使用した、非常に心地よく弾力性に富む最高級のソファだった。

大理石で出来たテーブルの上に、健康茶の入った信楽焼の湯のみが置かれている。健康茶とは駅前のスーパーで買った特価のハト麦茶だった、水イボによく効く。安物でもバレナケレバイイと思っていた。

「初めまして。取材をお受け頂いてありがとうございました、本件担当の木村です」

名刺を渡しながら、向かいに座るタダナカ氏に深く礼をした。「いやいや、もっと楽にして下さい。ちょうど頂き物のお茶菓子があるんですよ。一杯いきましょう」
お茶で？　と木村は少し微笑んで和んでいた。では早速と本題に、木村は聞いていた。
「ずばり。『既存の魔法』って、何でしょうか」
テーブルの上ではアナログボイスレコーダーのテープが回転していた。無論、録音の許可は得ている。タダナカ氏は茶をひと口飲んで、腕を組みながら語り出したのだった。

「『魔法瓶』ってあるでしょう。あれです、あれ」「というと？」
「あれはガラスを二重構造にして、その二重構造の部分を『真空』にすることによって、熱が逃げるのを防ぎ中身の湯を冷めにくくしてくれてるんですよ。完全じゃないが、冷めていくはずの湯が容器に入れておいて何時間経っても冷めていない。構造知らなきゃこれって不思議でしょう？　まほうびん」

聞いていた木村は「はぁ」と頷いていただけだった。

「常識が自分の知ってる常識で説明出来ないと、何でもかんでも『魔法』なんですよ。まほうびん」
タダナカ氏はまた茶を飲んでいた。利きすぎた冷房が彼の水分を奪いそうさせていたのだろう。秘書に携帯電話で茶のおかわりとお茶菓子はまだかと催促していた。
「既存の魔法と従来の技術、って並べると同じ意味合いなんですがね。『既存の魔法を駆使して新たなる開発を』なんて片方だけを堂々とでっかく掲げたら、そのまんま言葉だけをとるとただの怪しい団体じゃないですか。こう見えて真面目に取り組んでいるんですよ？　ちゃんと技術で我が社は」

トンガリ帽の頭に説得力という文字は浮かばなかった。何故技術という言葉の方ではなく『魔法』にこだわる、『従来の技術を駆使して新たなる開発を』でもいいんでないか、そう思った、だが。木村は無理やりに「ふーむ、なるほど」と一応は納得していったらしい。するとそこに秘書からの、頂き物と言われた茶菓子が盆にのせて運ばれ、登場したのだった。

「ああ、これこれ。先日、鍛冶野さんという業者の方から頂きましてね。んまいですよ、ワサビが効いてて」

白い小鉢に入ったそれを見て木村は目を丸くした、つい前に身を乗り出して、何もかもを疑った。

「これは……」

秘書から「どうぞ。この合金特製スプーンをお使い下さい」と一緒に出されたそれは、どう見ても木村の知識からでは小玉のスイカにしか見えなかった。表面は真緑に黒の縞、売っている小さいサイズの西瓜。スイカである。

「あ。柔らかい。ぷにぷにしてる」

呆然としている木村の向かいで、小鉢に入ったタダナカ氏の分であるそれを特製スプーンで突いていた。ぷにぷに、ぷに。形状記憶でも仕込んであるのか、強く押しても傷がついても、表面の皮は始めの状態にすぐ戻る。果たしてお菓子だろうか。おかしい。それより食べて大丈夫なのだろうか。どうやって食べる。「あのう……」木村は不安になり、タダナカ氏と秘書へ救いを求めるように顔を向けていた。

「熟してる証拠ですよ。では思い切って頂きましょう。えいや」

「えいや？」

タダナカ氏が落ち着いた掛け声を出して、思い切ってざくりと勢いよくスプーンを玉の上から直下で突き刺すと、パカリとくす玉のように綺麗に割れてそれの中から、わらび餅のような半透明で団子のような物が数個に寄り集まっていてこぼれて出現した。「ひいいいい」木村は両手を広げて飛び上がるしかなかった。生物だと勘違

いしたらしい、非常に気の毒である。

気にもとめず、タダナカ氏は折れもしないスプーンでそれの1個をすくい上げて、ひょいと口に入れていた。「んまい！」舌の上で数十秒と吟味した後で秘書に絶賛だ、そう告げてくれと指示を出していた。承った秘書は、すぐさま業者の所へと報告しに行くのだろう。何でもなく普通に部屋を出て行っていた。

「お、面白い食べ物ですね……衝撃でした」

セカンドバッグからハンドタオルを取り出して、冷静を取り戻した木村は額の冷えた汗を丁寧に拭き出していた。

「『お茶菓子』っていうんですよ。実は我が社で開発して、鍛冶野さんとこで栽培してもらってんですねー。ですが新しく出来たはいいものの、前例もないので一番に困るのは名前（ネーミング）を考えることなんです。魔法の瓜、マホーリー、まほうりいい、……散々内輪（うちわ）で揉めて試行錯誤して2度絶交して嫁を迎えて結局、『わかりやすい単純な名前を』ということで、『お茶菓子』に決定しました。どうでしたこのおやつ、美味しかったでしょう？　コラーゲンを多く含んでいるので美容にもいいですよ。コラーゲンてのは細胞のつなぎですからね、しっかり夏場は摂取して下さ……」

この話はまだ続くのかと木村はレコーダーのテープ残量を気にし始めていた。アナログでよかったアァァと安心していた。「すみません、テープの時間が残りありませんので、“最後にひと言”を！」都合よく言い訳をしながら、タダナカ氏の続いていく長話を止めていた。

・・・

仕事用の大型バッグへセカンドバッグと共に押し込まれた土産の『お茶菓子２０１０』は、関西だし醤油味である。ワサビの他に塩と海苔とキムチとコンソメ味などがあった、持ち歩くに重いので断ろうかと木村は思ったが、それじゃ後で全種類を発送しますと秘書に言われて「いえ。怖いので」と持ち帰り１個だけにとどまっていた。さらに。

『魔女のハートでお届けします』

タダナカ氏の最後のひと言に、取材を切り上げて帰って行った木村は、振り向かなかった。

3（庭球の）／過去

太陽が下界を照りつけていた。
気温が３６度を超えたあたりで、泉は次に到着予定の電車をホームの長椅子で退屈に待ちながら目を伏せて、のぼってくる暑さに堪えていた。汗は全身に吹きあがる、額に滲む、涙の代わりか流れてくる。屋根があるおかげで日向にいるよりはマシではあり暑さにはどうにか慣れてきたが、途端に眠気が走っていた。
（最近ちゃんと寝てないっけ……）
うつらうつらと頭を揺り動かす泉に、注目するような者はいない、乗車を待つ者は泉ひとりだけだった。

・・・

あれは泉が１３歳、中学2年生の生活が始まった春のことだった。新設して7年目の校舎、校則もルールも回を重ねて手直しはしてはいったがまだ少なく浅く、歴史が無い以上、早く実績が欲しかったと言えよう、全国模試テストや部活などでは教師や生徒が積極的に取り組み盛り上げていることが多かった。
特に部活の大会では、初めての出場校の他、例えば決勝に順調に勝ち進みでもしたら即行的に応援団ができ過剰にも盛り上がっている。祭のように。

駐車場に面したコート、間に高く遮るフェンスがあり、囲まれてテニス用のコートは全部で6面あった。ただし3面ずつは男女と分けられて、男子には男子の、女子には女子のスペースと決められていた。

「乱打を始めますので、よろしくお願いしまーす」「しまーす」「しまーす」
女子主将（キャプテン）である先輩を前に後輩たちはそれぞれ自分のラケットと2、3個の球を持って、声を掛け合いながらコートの持ち場へと予め決まっていたペアで各自散らばって行っていた。

泉も今年にガットを張りかえたばかりのラケットと球2球を持って、打ち合うためコートに並んでいた。練習が始まると、生徒は皆真剣になって球を追いかけていっていた。今度、春の地区大会が近い。それに向けての練習で、コート場を大きく男女に分断する背の低いフェンスの下に、転がって球は1つ2つ5つ9つと次第に溜まっていった。それを見学にきた体操着の新1年生が懸命に追いかけて拾っていっている。球を拾う姿は初々しくてとても可愛いらしかった。

去年、泉たち2年生もそうだった。数ある部活動のなか、体を動かしたかった泉は運動部に入ろうと考え、小学生の頃はバトミントン部に所属していたため、それに近い球技のソフトテニス部を選んだのだった。先輩たちが着ているウェアやスコートを履いてみたかったということもあった。見学を終えた後、仮入部をし、期間が過ぎたら正式に手続きをして本入部となる。何人かはそれまでに辞めてしまった者もいたが、厳しすぎた指導といった問題等があるわけでもなく、泉もそうだが無理なく自由に部活生活を残った生徒はエンジョイしていっていた。

乱打、肩慣らしに打ち合っている程度のなか、手元の球がなくなった泉は、球を拾いにフェンスへと目を向けた。すると球拾いをしているはずの小柄で半袖白Tシャツを着ていた新1年生が、女子コートの方ではなく男子コートへ体を向けて眺めている姿が目に入っ

ていた。「何してるの」泉は声を掛けていた。
「あ、す、すみません」
泉に驚いて体を強張らせ、すぐに離れて行ってしまった。よほど驚いたのか、態度が極端で泉は何なの、と不機嫌そうに見守っていた。怒ったつもりではなかったのだが。
球を拾うと、泉は男子側の方を見た。特に親しい者がいるわけでもない。同じクラスでも、用がなければ話す機会はあまりなかった。

なので、いきなり話しかけられると泉が少々動揺するのも仕方がない。
「それ、こっちのボールだ」
振り向くと、フェンスにもたれてある男子が泉に話しかけていたのだった。
「？」
「その持ってるの。男子用」
聞いてきたのは長髪を後ろで縛った、紺ランニングシャツに短パン姿の男子だった。日には焼けている方で、その格好と、短パンに『穂摘』と名入れしてあることから泉と同級か先輩であることが推測される。だが泉は知っていた、穂摘真之介、3年生。泉より年上で先輩である。もっと言うと、女子の間では上位でモテていた。浮いた噂も多かった。
自分には関係のない世界だと決めつけて泉は、無視していることが多かった。近づいて、持っている球を渡そうと手を差し出す。泉より背の高い男の穂摘は見下ろして、暫く何かを考えていた。

「何か？」

笑いかけるでもなく、事務的に用を済まそうとしている泉に「顔怖えぇ」と言った。泉にはそれでもリアクションらしいリアクションが湧き起こらなかったという。

（はぁ？）
差し出した手を引っ込めようかと迷っていると、球をサッと受け掴み穂摘といったその男子は数歩後ろに引き下がった。「もっと愛想よくすればいいのにー」そんなことを言っていた。
（余計なお世話……）
カチンと頭にきていたが、表には出せていない、あくまでも無表情を貫いていた。

いつからなのだろう、泉の表情が固まってしまうようになったのは。それは、何かをきっかけにして始まってしまったものだっただろうか、それとも、それが本来そういうものだったのだろうか。理由のわからない泉に手立てなどなかった。そもそも、表情のないことが悪いこととは、泉はこの時に思ってはいない。悪いことなのか？　わからない。
自覚がなければ手立てどころか、何も始まりはしなかった。
「知ってるか？　野崎泉さん、君は男子の間で何と呼ばれているか」
からかうようにして目の前の軽そうな男子は泉に挑戦的だった。持っていたラケットで、ぽんぽんぽんとガットで弾き球遊びをしていた。器用に、球は遊ばれている。「何て」気になるようなことを言われて、ピクリと片方の眉が上がった、「お、反応あり」と面白いものでも見つけたように彼は笑っていた。

『庭球（テニス）の女王様』

泉の背筋が音もなく凍りついたのは、言うまでもなかった。

4（ゲーム）／現在

システム開発株式会社『ＭＡＧＩＴＥＣ』、通称『魔界』と呼ばれたその会社内では、あるプロジェクトが進行していた。携帯端末仮想化ソフト『失敗修正マイライン［ＦＣＭＬ－Ｘ］（仮）』。仮なので呼びにくいが、開発途中のオンラインゲームソフトの名称である。ブロードバンドといった広帯域に渡るネットワークサービスや、定められた試用期間と機能制限のある有料のシェアウエアにすることなどを視野に入れていた。実現し普及して一般に浸透するまでには長く時間がまだまだかかりそうである。

だがそれよりもソフトの開発が優先されて、『失敗修正マイライン［ＦＣＭＬ－Ｘ］（仮）』はプログラムのバグを取り除くデバッガが必要だとされ、その試験用（テスト）ソフトはある社員によって屋外に持ち出されていたのだった。

「アナタ。お葬式の帰り？」

いつの間に近づいていたのか。駅のホーム、座ったまま居眠りをしていた泉に話し掛けてきた者がいた。すぐ傍で声がしたため、泉は飛び起きるように立ち上がってしまったという。

珍しく人前で慌てた泉がまぶたをこすりながら注目すると、頭のなかが益々混乱していった。それもそうで、真夏に黒服を着ていた泉も異質ではあったかもしれないが、話し掛けてきた者もなかなかに変質な感が否めなかった、何故なら、『彼女』は。

セイタカアワダチソウ色のトンガリ帽に同色のマントを着け、黒のレギンスの上に提灯（ゴールデンロッド）のように裾のゴムを絞ったハーフサイズのブ

ルマーを履いている。クシュと丸めた2つ分けの髪が触るとぽよぽよと軽く鳴りそうで、雰囲気が魔女にそっくりだったのである。
「お友達か誰かだったのかしら……」

返事のない泉にも構うことなく「お可哀想に、辛いでしょう。そうだ、私が何とかしてあげるわ！」と強引勝手に話を引っ張っていった。涙ぐんでいる。情に脆いらしかった。
（何なの、この人……）

さっきまで昔のことを夢に見ていただけに泉は、これはひょっとして続きではない夢なのかと思ってしまった。泉には、どうしたらいいのかがわからないでいた。そう変質者にはなかなか出くわすものでもない。子どものようで大人かもしれない正体不明の『魔女っ子』は、何やらゴソゴソと手提げのカゴバッグから黒い、手の平ぐらいの大きさの箱を取り出していた、何も表には書かれてはいない。

「ゲーム機で、ファミコンＰＣエンジンゲームボーイワンダースワンセガサターンプレステ６４ドリキャスキューブＸｂｏｘＤＳＷｉｉのどれかをお持ちじゃないですかぁ？」
魔女っ子は張り切って泉に尋ねていた。「ゲ……」勢いにのれずに困っていた。

「なさそうだったら携帯電話でもいいですよぉ。あ、でも〇コモのＮシリはメモリ足りないと思いますんで化けちゃうかも。できたらＰ番のを推奨しまーす（ハート）」
魔女っ子は張り切って泉に勧めていた。「はぁ……？」空気が違いすぎた。熱すぎて息苦しい。

「これは若き天才このカナン・ベルが開発した魔界シミュレーテッドリアリティゲーム、『失敗修正マイライン［ＦＣＭＬ－Ｘ］（仮）

『なり！　お試しあれい！」
魔女っ子は張り切って泉に箱を渡していた。「えええ～」箱は暑さと吸収率のよい黒のせいでホカホカと温かかった。熱いとまではない。

泉が思うことはひとつだった。
（この人、変質者だ。逃げなくちゃ、どうしよう）
姿格好といい、おかしな言動といい、全く信用できなかった。すこぶる元気に「税込８４０円でーす」と叫んで売っていた。かなりに胡散臭かった。
「通常価格、というか見込み予定価格１万３０００円なんだけど、特別にそれで売っちゃう。サポート付きだから、どう！？　どう～！？」
テンションの高い魔女っ子は、これでもかという風に泉にしつこくつきまとっていた。その執着さに、泉は傍目からではわからないが、とても怯えていた。それで。

（逃げるより、大人しく買って帰っちゃえばいいんじゃないかしら……）
必死になって場を取り繕い切り抜ける法を探して、ひとつの策を思いついていた。
財布の中身を思い出す。８４０円は中学生の泉には高く痛いが、交通の往復費用代と多めにお金を親から出してもらっていたので何とかなりそうだと考え、決心した。
「わかりました……」
あまりわかってはいないが、そのゲームとやらを購入することにする。のんきな魔女っ子は、「まいどぉ」と陽気になって両手でひとさし指と小指を立てていた。
「説明書はまだ作ってないから、今、簡単に説明しておくね♪」

上機嫌で泉に愛想を振りまき、手を叩いたり組んだり関節で遊んでみたりと動作が多い。無駄な動きだともとれていた。
「はぁ……」
相手任せに泉は頷き、どうでもいいようなため息をついていた。
「まだ正式な名前が決まってないの、この『ゲーム』は。最初、失敗修正だなんて単純なのつけてなかったんだけど、発案してた『リターン・トゥ・マイライフ』じゃ地味でわかりにくいからって却下されちゃって。この『ゲーム』は、ずばり。自分の過去での『失敗』を修正する『ゲーム』なのね」
風が吹いてきていた。……涼しければ良かったのだが、生憎と生ぬるいのが残念で、泉と魔女っ子の2人に浴びせてかかっている。木々は揺れ、途切れることのない蝉のやかましい音は景色へ溶け込んでいて、これは遠く彼方からの来訪者を迎えているのだと自然は言っていた。
遠く線路を急いで、泉が待ち望んでいた電車は、ホームへとやって来た。

（過去？）

もう一度、魔女っ子である彼女の言葉が聞きたかった。「今何て……」
呆けている泉に、魔女っ子は「ん？　何なに。質問どうぞぅ☆」と大きく見開いた目を見せていた。
「どういったゲームなんですか？」
聞き返していた。
「あー、この『ゲーム』のことね。長くなるから簡単に。『自分のこれまでにしでかした失敗を、直していく修正ゲーム』だよ」
汗ばんだ手にのせられていた箱に視線を落としながら泉は、心の

なかで「そんな馬鹿な」と何度呟いたことだろうか、懐疑と期待が交錯し、泉を複雑な気持ちにさせていた。「失敗って、例えばどんな……」全然リアルにも感じられない上に信じ切ることに踏み出せなかった。

こうしている間にも泉たちの横で電車は時刻通りに到着して停まり、エアコンで冷えた空気が開けられたドアから流れ込んできて徐々に薄くなっていった。

乗らなければすぐに行ってしまう。泉は先に、電車にと近寄って行った。しかし乗り込む前に後ろが気になって歩みを止めている、振り向けば魔女っ子が、絶やさず笑顔をこちらへと向けていた。どうすれば。迷う泉に、魔女っ子の手が差し出される。

「わかった。試しに、そこで起動してみましょうか」

何かを思いついた魔女っ子に、泉は「え……？」と反応するしかない。

「お試しね。まだ『試験（テスト）』段階だからさ……」

傍の蝉の声にかき消されそうな小さな声で魔女っ子は言った、泉には何のことだかさっぱりと理解はしていなかった。

乗車口で立ち止まっていた泉より先に早く、魔女っ子は電車に乗ってしまった。「さ、どうぞ。着くまでにちょっとくらい出来るよ」乗り込む時に泉の手から例の『ゲーム』の入った箱を取っていた。

『自分の過去の失敗を修正するゲーム』

そんな物があったとしたらそれは、きっと……

「ん？　私の顔に何かついてた？」

疑い睨む泉の痛い視線に気がついていても、トンガリ帽を被ったこの魔女っ子には通用しそうではない。魔女っ子、魔女の、魔界のゲーム――

魔法は、すぐそこに。

5（失敗）／現在？

何度、試合に負けたっけな。
もしも勝っていたなら、違う人生を歩いていけたかな。
だけど、何で戦わなくちゃいけないのだろう。このまま平坦でいられたなら。

「そりゃお前、戦わなければ生き残れないぜ」

そんな、仮面ライダーみたいなことを言っているのは誰？
私は前向きだ。涙なんか流さない。
後ろを振り向かずに行こうとしている。これでいいはずなんだ。
違うの？

＞i112627―1775＜

……穂摘。

・・・

４両しかない電車に乗車客は、数人しかいなかった。昼時ではあったが、数日と続く猛暑のなか、特別な用事や予定などがない限りは皆、このちょうど日が高くなる時間帯を避けていたのだろう。恐らく時間が変われば１時間に１本２本しか本数のない列車は満員にも近くなっていく。

連結付近奥には４人掛け、乗車口すぐには３人掛けほどの座席がある。中央には、向かい合わせて４人掛けの座席が並んでいた。乗り込んだ魔女っ子と泉の２人は、空き放題の座席のなかから日光のできるだけ当たらない４人掛け座席へと向かい合わせて座っていた。

窓の遮光カーテンを隙間なく閉めて、魔女っ子の彼女は持っている黒い箱を開封し、中身を取り出して準備を始めていた。

様子を窺っていた泉だったが、聞きたいことが山のようにあり、しかし聞いてはいけない邪魔になるかもという考えが浮かんで、遠慮がちに聞いていっていた。「どうするんですか、それ……」見ると、中から出てきていたのは折りたたんだ黒い携帯電話のように思えた。表面がノングレア（つや消し）の堅牢なボディ、開くと片方に液晶画面、一方には数字などの書かれたキーボードがついていた。

「とっても高性能なのよ、コレ……」

得意満面で魔女っ子は言った。自分で作ったようなことを言ってはいなかったか。とすると自画自賛だった。

「音声認識とか偏ったもんだけじゃないわ。『五感認識』システムを入れてるの。五感――見る、聞く、嗅ぐ、味わう、触る。視覚、聴覚、嗅覚、味覚、触覚。この真ん中のとこ、窪みがあるね？　ここで指紋照合も出来るし、裏のカメラレンズみたいな穴のとこで画像認識、要するに外部情報とかも入手できるんだぁ。ふふふ」

何故笑うのか理解できない泉だが、「はぁ……」と適当に相槌を

うっていた。
「さておき、そんな高性能を恐らく世界初実現成功したんだろうけど、えーっと、まずは登録ね。写真撮るよー。はいパシャリ」

言うとすぐに魔女っ子は、それを泉の方へ向けて写真を撮ってしまった。僅か数秒、慣れた手つきであっという間の出来ごとだった。
「え」泉のリアクションは至極遅かった。
「はい完了。１９９Ｘ年Ｘ月Ｘ日Ｘ曜日誕生、野崎泉、性別女、目はいいみたいね。左半身に姿勢が偏りがちみたいだから、気をつけてね。じゃ、とっとと始めましょうか。座ったままリラックスして目を閉じて」
言われるがままに泉は目を閉じた。あれ、誕生日に名前と、何で知っているのだと本当は聞きたかったが聞くに聞く暇がなかった、不安が大きすぎてもはや何が何だかわからない。

まだ発車時間までには数分あった。視界を閉ざした泉に入ってくる情報は、狭く限られたものになってくる。魔女っ子の声がよく聞こえていた。「リラックスして……痛くはないの。アプリタッチみたいに、信号を送るだけだから……」
それは催眠術に酷似していた。
始めはダウンロード、一方的ではあるが、泉に必要な世界情報が与えられインストールされていく。それからは情報が一括ではなく最低限容量の情報だけがリアルタイムで要求に応じストリーミングされる。ライブとオンデマンドの中間的性質を持つ言わばリクエスト方式で、全てはこのソフト１本でまかなえられるため、なるほど高性能、名がソフト、ゲームといった名前を呼ぶにしては呼称の域を優に超えていて、全く違った新しい名前が必要とされるだろうという。食玩の玩が社会的猛威（ブーム）を振るったように、付加価値の方が高くつき名の意味を薄く失わせていく……。

『失敗修正マイライン［ＦＣＭＬ－Ｘ］（仮）』は、あくまでもゲームだった。

泉にとっては、そう、『夢』を見ている感覚だった。

泉の前に、小さな機械が置いてあるだけである。

・・・

暗いトンネルのなかにいるような闇を抜けるとそこは、『光』だった。

あまりの眩しさに潰されてしまいそうになるほど、泉は熱くもない光に包まれている……かに思えた。

「う……」

目を開けることが躊躇われた。光を感じる、しかし強そうだ、こちらが負けそうだ、さっきまで暗い所にいたのだから目が慣れていない、だから慣れるまで時間を下さい……。

泉は心中で願っていたが、そんなことをしている間に、次の『情報』が耳に入ってきたのだった。そう、――『音』だ。

「それ僕んのー」

「きゃはははは、待ってー、待てー」

「なめくじがいるよ、なめくじー、先生にもってくー」

キーコ、キーコ、キーコ。

ぱたん、どたどたどた、シャリリリン。ばた。

たけやー、さおだけー……

子どもが遊ぶ音、叫ぶ音、虫たちの騒ぐ音、風の音、事務的なアナウンス。日常的な生活音だったが、今の泉には異質な状況に思えていた。「ここは……？」興味を引かれて怖がっていた目はとっくに開いてしまっていた。

泉が四つんばいになって砂の地面にいたことが確認されると、後ろを振り返って今度は大口を開けてしまっていた。見たことのある、覚えのある建物があったからだった、懐かしさが泉を支配していた。

幼稚園だった。

「ここって……」

ジャングルジムに滑り台、キーコキーコと鉄錆がこすれたような金属の音は、ブランコの鎖だった。誰か、子どもが乗って遊んでいたのだった、幼稚園児が着る服を着ていて。走り回っていたのだった。

時計のかかった赤い屋根の突き出た部屋が特徴的で、泉はよく覚えていた。

（私が通ってた幼稚園だ……）

だが。泉は事実を口に出して認めている。

「確か去年、閉鎖したはずよ」

地に足がつくように、しっかりと思い出していた。

「いずみちゃーん」

泉はまた建物とは違う方へ、だが、反射的に振り向いてしまっていた。この時まだ自分が呼ばれたとは思ってはいない、そしてその通りである、呼ばれたのは『いずみ』であって泉ではなかった。

「どおしたのぉ？　顔が真っ青だよぉ～」

目線の先には、小さな園児たちと、そのなかに交じっていた幼い、園児――立ち竦んでいる子どもがいた。泉は衝撃を受けていた。
片方にピンどめをしている髪型は面白くも変わりがなく、泉をそのまま縮めたらいいのだろう、その子どもを昔の自分だと悟ったからだった。衝撃で泉の足元がふらついていた。
「お、おしっこ……」
情けない声で絞り出すように言いながら『いずみ』は、足をガタガタと震わせて、固く両手を握りしめていた。よほど我慢していたのだろう。
「早く行っておいでー」
「がまんはよくないよーはやくー」
園児たちは『いずみ』にトイレへと行くように応援している。何だ、なら早く行けばと泉と『いずみ』は同調しているようで、おかしな感覚だった。自分のことだからなのか泉は『いずみ』を放っておけるはずがない。駆け出す『いずみ』を追って駆け出す泉、「これは私だ」と自覚する泉。悟ったのは、昔の自分だけではなかった。ここが自分の『過去』なのだということを。

――と、いうことは。
――来たるべき不運は、容易に予想がついている。

（待てよ、……この後って……）
小走りになりかけた泉に悪寒が走った、それと同時に悲鳴が上がっていた。「わああ！」見ると、行く手を阻み大将並みの貫禄を持った男の子が子分を連れて現れていた。泉の記憶によれば男の子は隣の年中組の荒川サトシ。
どうやら繁みに始め隠れていたらしいが、飛び出してトカゲの尻尾をつまんで逆さまにブラブラと、『いずみ』の前に突き出していた。

「この前のお返しだぜ、いずみ！」
ベストなタイミングとは、こういう時のことを指すのだろう。何をされたのか不明だが復讐は見事に叶えられていた。
突然の出現に驚いた『いずみ』は尻餅をつくような格好で座り転んで、園児服を着た股の間から……水が、地面の上を流れていった。
「あー！」
「ああー！」
「あああああ～！」
騒ぎ出した周囲に、泉も便乗していた。絶叫している。
（私の過去おおおおお）

トカゲは尻尾を切ってまっしぐらに逃げていた。

6（修正）／過去現在

いずみの奴、おもらしだ。
皆に言ってやろうぜ、ぎゃーはっはっはっ……

消えてくれない記憶。泉は、全身に火がついたかのように熱くなり死にそうだった。いっそ死んでしまってもいいとまで思ってしまっていた。恥ずかしすぎただろう、かつて自分が体験した過去だった。

（あああああああ……）

ふらついた足で左に傾きながら移動すると、木にぶつかっていた。頭も肩も、ぶつかった痛みどころではない、頭の毛を掻き毟っていた。「えーん、えぇーん……」木にすがっている泉の背後で、座り込み身動きできない幼い方の『いずみ』は、泣きじゃくっていた。助けを呼んでいた。

……その一部始終を、上から見下ろしている者がいた。上とは、泉のいる木の上である。

「プ」

堪えてしまおうと我慢をしていたらしいが、ついに出来なくて吹き出してしまったようだ、息が漏れてその気配に泉は気がついてしまった。

泉は何気なく見上げてそして驚いていく。幹が太く安定した枝の上に立って、見下ろしている彼、男の子、少年のように見える、それだけは判るが。

「……巻き戻しましょうか？」

落ち着いた声が、地面に届いていった。泉は愕然として何の反応も示すことなく突っ立っていた。

（巻き戻……す？）

オウム鳥の真似で、言葉だけを心のなかで繰り返していた。すると『彼』は、助走も無しに軽く枝を足裏で叩いて飛び、落下した。着地も見事ながら、態勢崩れることがなく器用優雅に降り立って砂の地でお辞儀する、黙っていた泉に顔をゆっくりと上げて向けていた。黒いスーツを制服のように、下のシャツにはネクタイを締めて、スラックスを履いてはいるが足がとても馬のように細く頑丈そうだった。

「初めまして。魔界ゲーム案内人の『ヒューマ』です。お買い上げ頂きありがとうございます」

まずの自己紹介を始めていた。「は……」まだ泉は数々の衝撃から返ってきてはいない。気の抜けた声を出してしまって背筋を伸ばし数歩、下がっていた。

「案内人……ね」

次第に感覚は取り戻していっていた。「もう大分とご存知だとは思いますが」少し口元を緩ませて彼、ヒューマと名乗った相手は泉に説明をし始めていた。「ここは『ゲーム』のなかです。あなたがお買いになったソフト『リターン・トゥ・マイライフ』のね」

そうヒューマは言うが、泉は「あれ？」と違和感を感じていた。その原因はゲームのタイトルにある。「『失敗修正マイライン……』何とかじゃありませんでしたっけ……」

しかし泉の疑問はよそに、ヒューマは続けて言っていた。「この『ゲーム』は、その名の通り」手の平を広げてみせていた。「過去

の失敗を修正するゲームです」何度も、これまで繰り返されてきたフレーズでもあった。
「『失敗』？　『修正』？　……あなたたちはそう言うけど、修正って一体、どうやれっていうんですか！？」
初めて聞いた時からの抱えていた疑問を聞いて、半ば胸の内がスッとした泉は息を吐く。あの怪しげな魔女っ子も、今こちらにいる案内人のヒューマとやらも、一方的な説明で疑問ばかりを作り出しているような気がしていた。

「……ふむ」
腕を組み考え始めたヒューマは、間を置いて泉に提案を持ちかけていた。
「……さっきのを例にしてみましょう」
さっきの例とは幼いいずみの失態のことだったが、それを持ち出してきた。
「子どものあなたをすんなりトイレへと向かわせれば、あなたの『過去』においての失敗のカウントにはならなかったということですね」
そうだけど、と泉は頷いた。「でも、もう……」思い出したくもないものを見せられて、思い出して恥ずかしさの消えない泉は再びに落ち込んだ。

「じゃ、『巻き戻し』ましょう」

俯いていた泉の傍で、ピ、という発信音が鳴る。「え？」それからキュルルルルという滑る音も。
ヒューマの手にはどこから取り出したのか小型のリモコンのようなものを持っていた。もしかしたらこれで操作を、と泉は予想を立てている。「ここんとこアナログ対応なんですね。あんまり急に場面が変わると人間がついていけなくって。ははは」笑ってはいる

が表情は無だった、泉は不気味だと単に思う。
「場面？」「そら、この通りに」
ヒューマが言ったと同時に、一瞬だったが視界がブレて歪んでいた。チーン、と閃いたかレンジで温め終わったかのような音がした。完了だったらしい。
「何が……」
「１０分前に戻りましたよ」ヒューマは教えてくれていた。
「ご覧下さい、向こうから――ほらね」

ヒューマが指し示す方向の奥には幼稚園の園舎、そこから小さな足で急いで駆けて来る子どもがいた――いずみ、である。
さっきの『巻き戻し』、事が起きる前の光景だった。この後にいずみはガキ大将たちの復讐なんとやら、餌食となるのだろう。何とかせねばいけなかった。
「『巻き戻し』って、そーいう意味！？」
やっと現状についていけた泉だが、だからといって何をすればいいのかを叫んでいた。
「悪ガキはあっちで隠れて控えてますし、どうぞ好きなようにして下さい。自由です」
そんなことは分かっていた。「好きなようにってねえ。自由にとか修正って、一体、どーすんのよおお！」絶叫に近かった。
「――だから。『こう』するんですよ」
ヒューマの抑揚のない声に乗じて、目の奥が鋭くと光っていた。

7（実行）／過去現在

案内人のヒューマは肩を回して筋肉をほぐし、両の手の平をブラブラとさせながら、繁みの方へと近寄って行った。繁みには――子どもが数人、隠れ潜んでいる。何故かは知っていた、お返し（ふくしゅう）、と言っていずみを驚かすためにである。

待機していた子どもたちは物音がしたと勘づき繁みの向こうを見るが、誰もいなく、予想していたこととは違い別の者――大人でも現れたのかと思って急ぎ立ち上がって、背を向けようとしていた。

だが首ねっこを捕まえられて、逃げようとしていたのだが逃げられなくなってしまっていた。掴んだのはヒューマ、顔は崩さず、口からは特に何も発さない。「ひ」身動きを封じられた子どもたちの短い悲鳴は、すぐに消えていた。

ポカスカゴン。

ポカ、スカ、ゴンと、順番に子どもたちは突如現れた敵に頭を殴られて倒れていった。出た擬音も非常に人工的、漫画的だったが当然だろう、実際には起こり得なかった現実だった。

それより悪だくみを考えていた子どもたちはヒューマの正義の鉄拳によって一掃されていた。ヒューマは事がひとつ済んだと空を見上げて、カラスが「カー」と鳴いているのを目視確認した。あまり鮮やかな色彩の空ではなかった。「ガー」カラスは濁った声になった。

「こっちの姿は見えてませんからね……」

見えない敵に片付けられて、繁みを隔てた横を、暫くすると駆け

てきた過去の『いずみ』が通過していった。まるでそこには何も起きずに無かったかのようで、知らん顔をしていた。走り去る姿を見送ってヒューマは手を振ってみせて、「――いいですか？」と振り返り、今度は泉の顔色を窺っていた。「アンタは――『鬼』ですか！」ヒューマのとった行動に泉は素直に納得ができないでいるらしかった。ヒューマはしれっとした顔でこう答えていた。

「ゲームですから」

然り、ここで起きたことは実際ではない。何をしても自由である。とりあえず邪魔が入ることはなく、いずみは目的地のトイレへと辿り着くことができただろう、おめでたかった。

「ん？」

泉は異変、上空で光る『何か』の気配に気がついた。空を見上げてみた。

真上を見上げてみても正体が分からず、やや前方に体を傾けての見上げた格好と泉は、なっていた。

ぱんぱかぱーぱっぱー。

明るいラッパの陽気な音楽が鳴っていた。かたかたかた。竹を叩いたような音が鳴る。そして再びに、

ぱんぱかぱーぱっぱー。

もう一度同じラッパの音が鳴ったのだった。「何なのこれ」泉が驚いたのは音より、『それ』だった。

帯状に、一定の幅があって細長く続く形の『それ』の横には日本語で『安心度』と書かれていた。泉の上方で浮かんでいる。「安心……ど？」よく目を凝らしてみると『それ』の左隅には「0」、反

対側の右隅には「１００％」と書いてもあった。そしてその全体の４分の１くらいが左側から赤く染まり、「２６％」になっていた。もっとよく見ると、さらに上空、『それ』の上には「ステージ１・クリアー」と書かれている。

「ああ、そうでしたね。ステージクリアーごとに『安心度』が上がります。１００％になったらゲーム終了でエンディングです。途中セーブ・リタイアはできませんので、あしからず」

ヒューマが説明し終えると、泉は「あくまでも『ゲーム』なのね……」とぼやいていた。肩の力が少々抜けている、何かに期待しすぎてがっかり、そんな所だろう。

（エンディングまでいったら、ここから抜け出せるのね……）

泉はそう解釈をした。

「では、次へ行きましょう。ポチっとな」「は」

ヒューマの一声と手に持つリモコンのキー入力の動作が一緒だった、２人のいる世界が変わる。キュルルルル、効果音だろう、耳障りで、視界が歪み、空気が変わる音。アナログ対応だとヒューマは言ったが、あまり心地よいものとは言えなかった、どちらかというと聞いてしまって気持ちが悪い。

場面が変わる。

泉とヒューマは、暗がりの部屋のなかにいた。「ん……？」シン、と静まり返っている。電気の点いてない部屋の、中央付近に２人はいたようだった。

「ここは……あーっと」

「ご存知ですか？　台所みたいですが」

ヒューマが尋ねていた。言う通り、感覚が慣れてくると傍にある

物の輪郭がはっきりとしていった。流し台、コンロ、冷蔵庫、食卓テーブル、電子レンジ、戸棚、勝手口。コンロの上に置いたヤカンや鍋、フックに引っ掛けられたフライパン、流し台には洗い桶や束子、奥様洗剤。角には、スーパー除菌やゴキジェット。空き缶が2つ3つ散らかっていた。

「私の家の台所です」

泉は言った。「何だ、そうでしたか」納得したヒューマは、冷蔵庫に近づいた。「……で、9月23日。土曜で、秋分の日ですね。この日に何かあったのですか？」冷蔵庫の扉にはマグネットで紙のカレンダーが留めてあり、色々とメモ書きされていた。日付ごとにボールペンで丸印がされていて、22日までずっとついていた。「いつの23日……？」泉は懸命に思い出す、9月、秋、行楽……？

「あ。そうか、遠足だ。違う？」

泉は閃いていた。というのも、食卓には小さな水筒、まだおかずの詰められていない空のお弁当箱、それから椅子の上には子ども用のリュックサックが置いてあったからだった。これはこれから遠足に行くぞと用意されたものだと簡単に推測ができる。おかげで思い出すことができた。

「行きたくても行けなかった。何故なら」

泉は言いながらヒューマを押しのけて、冷蔵庫の扉を開けていた。

開けるとなかで電気が点き、飲料や食べかけのおかず、残り物などがラップに被されて皿にある。『たくましチーズ』と円形のパッケージに書かれたお子様向けのチーズは、数年後に賞味期限切れ問題で騒ぎになることが分かっている。

泉は、ドアポケットにある牛乳を手にとった。

「これよ……」

開封はしてある紙パックの1リットル牛乳。白地の表には『牛乳です。』と商品名が書かれている。そんなことは言われなくても分かっていた。

パックを持つ手が小刻みに震え出していた。そして叫んでいたという。
「私、これのせいでお腹壊して遠足に行けなかったのよお！」
そうらしい。

泉は勢いよく、折りたたまれていた飲み口を開けて流し場にと突進して行き、排水口に中身を流し始めた。白く若干ニオイのする液体が注ぎ込まれていっていた。
「確か5歳の時の幼稚園遠足だったわ、朝早くに目が覚めて起きてたものの、飲んだ牛乳が、ほらあ！」
空になったパックの先頭屋根部分に書かれていた賞味期限だったが、見ると2日前だった。危険である。
「お母さんの馬鹿ああ！」
泉はとても遠足を楽しみにしていたらしい。前日に用意を済まし早起きしたぐらいだ、よっぽど行けなくて悔しい思いをしたのだろう。当日に休んで横になっていた泉は、母と父の会話を聞いたのだ。
「あの牛乳が当たったみたい」とため息混じりで話す母、「仕方ないなあ。今度イカちゃん人形を買ってきてやろう」と励ます父。イカちゃん人形が後日、奈良で買ったシカちゃん人形に変わって現在泉の部屋のクローゼットにしまわれているらしい。そこまで懐かしく泉は思い出してしまっていた。「別のがよかった……」

ぱんぱかぱーぱっぱー。

あまり気分とは合わないラッパの音が頭上で鳴っていた。『安心度』は４７％に上昇していた。疲れを示すかのように肩を落としていた泉に、ヒューマの淡々とした声が降りかかっていた。
「じゃ、行きますよ」
『失敗』は『修正』されている。例え、他人には下らない他愛ない

ことでも本人にとっては下らなくはない躓(つまづ)きであることなんて、山のようにある。ひと山を越えてしまえば笑う話で済むのだが、越えるまでが大変なのだということは言わずとも分かるだろう。

『失敗』は『修正』されている。本人が『失敗』だとすれば、それは『失敗』なのだった。

ぱんぱかぱーぱっぱー。

2度目のラッパが鳴った。何故か、2度鳴るらしかった。

7（実行）／過去現在（後書き）

９月２３日はテニスの日。
日本テニス協会と日本プロテニス協会が１９９８年に制定した。
秋分の日は、「祖先をうやまい、なくなった人々をしのぶ」日でもある（Ｗｉｋｉｐｅｄｉａより）。
そういえば。へー。偶然。

8（問題）／現在

２０００年問題。Ｙ２Ｋ問題、ミレニアム・バグとも言われたそれは、ただの杞憂に終わっていた。コンピュータなどで日付を扱う場合、例えば年号を２０００年ではなく下２桁をとって『００』、１９００年と誤認した場合、プログラムで誤作動を起こす危険性があるとして騒がれていた。この年は閏年でもあったため、金融機関や交通その他で多少のエラーは発生したものの、世界規模的に大きな問題になることは報告されなかったようである。

報告されなかっただけかもしれないが。

「何してんですか赤福さん。辞書なんか開いちゃって」

開発室の入り口からパーティションで仕切られた壁を伝って左へと進み曲がると、手前から3番目、割と整理されていた机に向かって赤福と呼ばれた若い社員は振り向いた。背後にはこちらも社員である若い男、首から提げられていたプラカードの名札には顔写真が付き、『三度（みたび）』と表記されていた。赤福は机の上でたちあげられているパソコンの前で書類を見ながら、真剣に考えごとをしていた最中だった。ちなみに辞書はネット辞書、パソコン画面で開いている。

「２０００年に何があったっけなーとか思っちまって。ただの興味。システムバグのことをあれこれ考えてたら寄り道しちまった」

２０００年問題もプログラム・バグ。大事には至らなかったという結果を得られたのには、想定される問題に対し充分な事前対策と言及、規模が世界に及ぶため、皆が慎重になったおかげだろう。時間というものがあれば、余裕を持って対処が可能である。

「結果よければ良し。まー、デバ（デバッグ）もそんなもん」「直せば済むことなんですよね」「そゆこと」

固まっていた体を動かして赤福は聞いていた。
「それで、そっちの会議はどうなった。ゲームのデバ（デバッガ）、見つかりそう？」

赤福は椅子にもたれながら、左右に揺らせて返事を待った、だが聞かれた三度は顔を曇らせ、いい返事をしなかった。「それより、許可が下りない」それを受けての舌打ちだった。「チ……」
面白くもない返事に赤福は不満をぶちかましていた。
「最強の開発ができても、上が首を縦に振らなきゃ進まねえよ、全く」
「ゲームの危険性をまた持ち出してきたよ。あれだけ最初の段階でもめたのに、またこれだ」
不満に三度も参加しているようだった、２人して言いたい放題だった。

「新型インフルエンザの流行が収束に向かった時に、過剰になったワクチンの廃棄問題があったよな」
「それが何か？」
赤福が言いながら、パソコンをいじくり出していた。検索して出てきた新聞記事を読み上げてみる。
「余剰となった輸入ワクチンへの支出額は廃棄分と違約金を入れても８５３億円だとさ。輸入解約で２７３億円節約できたとしても、億単位で金が動く。俺らがやろうとしてることは、病気じゃないがこれより金はかかるぜ。一体何億かかるやらだ……」

つまらなさそうに欠伸をした。三度は何を分かりきったことかと言いたげに、赤福を見ていた。
「どんだけ金がかかって無駄になろうが、足りないよりはいい。ま、そゆことだ。結果よければ良し。しかしまー、ぶっちゃけ地球人口がもうすぐ７０億人とか言われてるのを聞いて、俺、半分くらい消

してもいいんじゃないかとか思うわけ。誰が地球を汚してるのと聞かれたら、人間だろう？　減ればゴミも無駄も減るんだぜ」
赤福は笑いながら堂々と大声で言っていた。三度は「おいおい」と苦笑いで誤魔化していた。
「俺はそれを聞いて〇〇ムのテロを思い出した。危険だやめろ、その思想はストップ」
赤福に手で待ったをかけていた。
「日本人の平均寿命は数年後に段と縮むぜきっと。８０歳？　そんな時もあったなあ、とかな。戦後生まれは体が丈夫に出来ていないんだぜ、医療がどんだけ発達しようが無駄に終わらなきゃいいがな。誰のための開発だ？　俺、この前行った内科の先生の方が病人に見えた。仕事で疲れてるんだろうけど、ありゃダメだわ……」

そういう毒舌ぶりの赤福だったが、目はパソコン画面を通して違う所を追っているかのように見えていた。恐らく悪態が本心ではない赤福が一番言いたいことは、ひとつだけ。生きるということへの考え方だった。

「戦わなければ生き残れないよな」

ひとり言のようで、誰かに聞いていた。三度が、代わりに返事をしていた。「うん」
「じゃあ、ゲームが世に出れるように頑張らないとな。後よろしく三度さん」
三度の方へと振り向き、ニヤと笑ったら次は、立てた人差し指と中指のセットで敬礼、扮していた。「何とか頑張ってみますよ。もう手がけてんですから止まりたくありません」上手く乗せられていた。

「そういえば……鈴木は何処行った？　外出なんて珍し……」
辺りを見回した赤福が、妙なことに気がついたのだった。開発室の一番奥で目立たない机、そこが鈴木という人物が座る席なのだろう、今は無人だった。本や紙は揃えられていて整い、パソコンや機器は電源もついてはいないし明らかに『留守』だった。
「……おい、まさか。『ゲーム』は！？」
赤福が慌てて席を立つ、三度に詰め寄っていた。「し、知らね……」本当に何も知らなさそうだと赤福は瞬時に悟って机を睨みつけていた。「『ゲーム』を探せ。試験用のだ。あんなバグだらけの物を勝手に持ち出したんじゃないだろうな、あの馬鹿」
興奮している赤福に「落ち着け、そんなにまだバグが残っているのか」と聞いた。

「報告されて直してないバグが数件、ゲーム名もまだ決定してないから元のままだし、音は鳴るわ飛ぶわ、人の頭も飛ばなきゃいいけどな。それに隠れてるバグだってあるだろ、それを見つけてくれるデバッガをこれから探すんだろうが、このボケ」

会社用の上着の袖を捲り上げ、細くストレートに切られた髪を三度梳いていた。玄関まで、怒った足で歩いて最後に声を掛けていた。
「外行ってくる。もし電話繋がったら、『ゆっくり話をしよう』って言っといて」
赤福の眉間の皺が何だか恐ろしかった。

9（途中）／過去過去現在

よく考えてみれば凄いことなんだよね。失敗を帳消しに出来るなんてさ。

人間がタイムマシンで過去へ行きたがるのは、大半がそう願っているからなんだって。

あの時、ああしておけば。止めていれば。違う方を選んだら。手を貸せば。助けられたのに。未来を変えたい……

綺麗な道を、歩きたい。

誰かが、否定していた気がする。誰だっけ。

誰だっけ……

・・・

吹く風に、僅かに砂が混じっていた。陸上競技が行われるトラック、フィールド内では、集まった体操服姿の小学生たちで賑わっていた。本日これから競技大会が行われるという。晴天ではなく曇り空だったが、天気予報では降水確率２０％と雨の心配は特になさそうだった。

＞ｉ１２６２１―１７７５＜

（ここ、覚えてる……）

泉は、立っていた。
周回走路のトラックと、囲まれて中央にあるのが幅跳びなどで使用されるフィールド、それらを全て一望できる傾斜スタンドにいた。階段に立って暫くは考えながら、泉は記憶から記憶の欠片、また欠片と時間をかけてゆっくりと思い出していった。場所、そして自分の『失敗』、何歳だった、いつの頃の。ＴＰＯ、時と場所と場合、思い出された泉は、何も言うことがなくなった。「……」単純な自分の失敗を、悔いている。
隣で同じく時を過ごしていたヒューマは、泉に問いかけていた。
「どうしますか、それで」
ヒューマをひと目見た泉は、くす、とだけ笑ってみせていた。「そうだな……」これはゲームと、ならばどんな酷いことでもしてみせようと泉は意地悪になってみていた。
「確か小学５年生。小５の『泉』を、そうだな……トイレにでも閉じ込めちゃおうか」
そう提案している。

「何でまた」
ヒューマの問いに、泉は素直に答えていた。
「コケちゃったの。それで１番になれなかった。途中までは先頭を走っていたのに」
目には見下ろしたトラックが映っていた。生徒たちが集合し列をつくり名前を呼ばれ、スタートと同時に駆けていく。我先にと、ゴールを目指し区切られたレーンを走者は競っていた。
あのなかに交ざり自分は躓(つまづ)くのだと、分かっていた。
「悔しい思いをするなら、走らなければいいでしょ？」
それでトイレへ？　と、ヒューマは辺りを見回して探してみた。
「たぶん、トイレにいるんじゃないかな……」泉はよく覚えていた。

記憶に自信たっぷりの泉に導かれてヒューマと一緒にトイレへと向かうと、今の泉にそっくりだった子どもが通りすぎていた。髪は短いが後ろで束ね、用だけを済まそうと足早だった。2人とも姿は見えないので、泉は予想通りに現れた過去の『泉』に安心して近づくことができている。だがヒューマにとっては女性用のトイレへ入るには抵抗があるため、「外で待ってます」とだけ告げて泉から遠ざかっていった。

トイレの個室には『泉』が入って、鍵をかちゃん、とかけた音がしていた。

このまま外からドアを封じてしまえば、『泉』は出てこられない。出てこなければ、参加する競技は棄権だ、先生が捜しにくるかもしれないが、泉はどうなろうと、そんなことはどうでもいいと思っていた。

（恥をかかなくて済むんだよ）

実態のないもうひとりの『泉』がいて、泉に教えていた。

（走って、コケて、それでも何とかゴールへ足を庇いながら行って——泣いたよね、悔しくって）

うん、と泉は確認するかのように頷いていた。

（『修正』しちゃえ……）

泉がドアに手を差しかけた、そのときだった。

『それでいいのか？』

どの『泉』でもない男の声が耳元でしていた。「誰？」ヒューマではない、男の声だった、としか泉は判別できなかった。振り向いて男の姿を探すが、男どころか泉のいる半径1メートル以内には人

はいなかった。個室から出た洗面台で数人、小学生の女生徒がたむろっていただけである。それに女子トイレに男がいるはずもない。だとしたら誰なのか。気のせいだという判断しかできなかった。

「違う。今のは……」

気のせいだ、と否定しながら、実は肯定していた。「思い出した。穂摘が言ってたんだ」泉は今の声が自分の記憶によるものだと解った。よく思い出してみる。

泉は部活動で、数少ない男子との交流のなかでも穂摘とはよく話をしている方だった。泉にとっては先輩と後輩、男と女、同じ中学生というだけで、育った環境も空気も立場も性格も違う、なのにすれ違わず、接点ができている。

場所は、テニスコートを出てグラウンドを通るとある水飲み場だった。端の蛇口を捻って思い切り水を放出しているのは穂摘で、泉は後から水に用があって来ていた。土曜午後の昼下がりは春で陽気とはいえど動くと暑く、練習の合間の休憩に汗をかいた顔を洗い流そうと思って足が向かった。すると先客に用が同じく、背中が汗ばんだシャツを袖なしに捲り上げて穂摘は来た泉に挨拶を交わしていた。「よう女王」

端までは行かず、穂摘から離れて泉は蛇口を捻って水を出していた。

「やめてくれます、その言い方」

抵抗を忘れてはいなかった。

「さっき練習試合に勝ってたじゃん。さすが女王だね、って褒めようかと思ったのに」

「いつも勝ってるわけじゃありません。たまに……負けます」

水で顔を洗っていた。

「そらそうか」

穂摘は泉を見ていた。タオルで首の後ろを拭い、肌の上には汗が

光っていた。
泉は視線に気がついているのかいないのか判らない素振りで、水をかけた手首や顔を持参したタオルで拭いていた。始め眼中にはなさそうだった泉だが、横をふいと向けば穂摘が見ていたので視線が重なって、言わずにはいられなくなった。「何ですか」怒っていたつもりはなかった。
「試合は楽しい？」
穂摘が、泉に聞いていた。「は？　……はあ、楽しいですけど」変なことを聞くなと泉は引いていた。
「そう、ならいいけどね。楽しくなきゃ何で部活してんのって言いたくなるし。そんなに強いんならさ、敵知らずで退屈じゃん。勝つ勝負をして楽しいのかなーなんてさ……」
聞いた泉は大きな誤解だと言っていた。
「私は無敵じゃありません。冗談じゃない。勝手に女王とか能面とか冷たいとか、言わないで下さい」
泉は暑さやだるさもあったのか、イラついていた。泉にとって穂摘は非常に腹立たしい存在だった。つい先日に顔が怖いと言われたばかりでもある。
「……だな。能面とかは言った覚えはないけど。悪かった、ごめんな」
詫びていた。思いもしなかった彼の謝罪に泉はうろたえたが、「いいです、別に」と顔を背けることしかできそうではなかった。素直に素直で返すことが、今の泉には困難だった。『謝らないで。謝られても』、何度泉のなかで回ったことだろうか。
調子を整えて、泉は落ち着きを取り戻すために考に出る。
「……勝つか負けるかなんて……する前から分かるでしょうか……

？」

泉は誤魔化すために話題を微妙に変えてみていた。変えられて穂摘は間が空いたが、「……負けると分かって勝負しない、とかは……ありかもな」と言って、さらにこう言っていた。「……でもそれでいいのか。本当に」……

疑問である。

「未来なんて……分からない」

だから勝負をするのだと、泉は穂摘に言っていた。

表情は、崩れなかった。

１０（安心度）／過去現在

未来が分からないから面白いんだよね。
未来が分からないから怖いんだよね。

どっちなんだろうか。どっちでもあるよ。誰にでもある。私にだってある。
でも、立ち止まってもいられない。すぐ選ばなくちゃ。だって時は止まることを知らない、動いているのだもの。
だから私は前を進むのよ――怖くない。

……泉の意志は固かった。時の流れに身を任せているようでいても、流れている身は石（いし）のよう。それは堅実な芸術家（アーティスト）に似ているのだろう、波を起こしているのは石ではなく、時の方だということを……

・・・

競技場から離れて観客席からも遠ざかっていくと、自販機のある休憩所や開けた場所がある。そこへは近づかず、泉は膝を庇いながら出来るだけ目立たないように壁に手をついてゆっくりと進んでいた。膝は擦り切れて血が滲み出ていて、付いていた砂は払っていたものの、痛みが感じられた。早く洗って消毒しなきゃと気は急（せ）いている。
しかし膝の痛みは泉にはたいしたことはなかったのだった、別の痛みがある。
（残念……）

競走（レース）を終え、1着になれなかった泉に襲いかかってきたのは悔恨の念や未練といった、厄介な代物だった。転んでしまって取り返しのつかない結果に小さな泉は小さく呟くしかない。
（悔しい……）
一歩一歩と足を進める度に感じる膝の痛みと、頭のなかで晴れないモヤとの戦いながらの前進だった。早く水のある所に行って休みたいと……砂漠の旅行者のように願っている。

「泉ちゃん。待って」

泉が歩いてきた方向から、人の声がしていた。「……？」名前を呼ばれて泉が振り向くと、ばたばたと地面を走る音が近づいてきた。泉と背格好の似た女子が数名、体操着だが小学生、泉の友達だった。
「ミユキ、サユル、実花……」追いかけてきた友達を呼び、泉は驚いて「何」と聞いていた。
「ひとりで勝手に行っちゃうんだもん。待っててって先生に言われなかった？」
「ケガしてるじゃん、見えなかったよ。一緒に洗いにいこ、あっちでよかったよね」
「泉ちゃん見つかったって先生に言ってくるー」
「砂がまだついてるよ、背中に」……

ひとりでここまで歩いてきた泉に友達は、囲むようにして騒ぎ始めていた。
（そっか……）

心配かけちゃたか。そう泉は反省し、友達に微かに笑いかけていた。「ごめん……」
鬱陶しかったモヤだけが消えていった、今の泉に遮るものはない、

痛みは最初からなかったのだとさえ思えていた。

その光景を一切、手を貸すことはなく静かに傍観者として見守り、安堵のため息をついていた者が2人いた。過去の泉を見ている『泉』とヒューマ、彼らは見終わったと安心のような安らぎを得て、その場を立ち去ろうと体を傾けていた。

「さ、次に行きましょうか……次が、ラスト・ステージです」

案内人のヒューマは与えられた仕事をこなし、肩を叩いて次へと促していた。「うん……」自然と足の動かない泉だったが、容赦なく不細工な効果音は上空で鳴っていた。ぱんぱかぱーぱっぱー。さらにもう一度。ぱんぱかぱーぱっぱー。「……」泉は歩き出している。「……行こう」

上を向くことはなかったが、『安心度』は47%を記録していた。パラメータの上昇も下降も判定結果の反映もないのか、数値は47%、以前のままで変動がなかった、これはどうしたことか。見ていない泉には勿論と分かるはずもなく、案内人であるヒューマも不思議とは思っていなかった。

それより、『安心度』には合致していない。安心を得たはずの泉と数値とは、『ズレ』が生じていた。

この『ズレ』は、バグであれば直せば済むことだった、だが今は、ゲーム中である。

何も知らない泉はヒューマに尋ねていた。「ゲームを途中で止めることはできないんですか？」『失敗』であるのに回避しようとはしなかった、即ち傍観、放置。自分のしていることに無意味さを感じたのだろうか、泉は深刻そうに聞いていた。

「原則としてですが、途中セーブ・リタイアはできませんと言いました」

泉に負けず普段から感情のないに徹した顔をしたヒューマは、泉にそう告げていた。
「そっか……やっぱり」
がっかり、に近い姿勢を見せている。ヒューマは何故そんなことをと、泉に聞き返していた。
「『失敗』なのに修正しませんでしたね。……次は、大きいですよ」
１００％まであと５３％である、ヒューマは次がラストと言っていた。恐らくはプログラム上でステージ数が決まっており、１００％でユーザーないしプレイヤーはクリア出来るようにプログラミングされているはずで、それを満たすためには泉の過去から数値を上げる要素をゲームは要求せねばならなかった。
泉の奥深く、記憶の沼のなかからの探索は、泉に気がつかれることがなく順調に……
次の『失敗』を用意していた。

・・・

飲食店、呉服店、繁華街を過ぎて歩道橋を渡り、目下の国道を尻目に去ると簡素なビル街にと続いていた。ビルとビルの隙間を地下鉄道やタクシーといった交通手段を使わず足で通り抜け、大通りに出ると信号待ちをしている一角に出ていた。
闇雲に走っているわけではない、仲間からの情報を頼りに、形跡を辿っていた。
『バスには乗ってるようだな。１１時３７分発だったらしい、そこから右へ曲がるとドンキがあるだろ、その辺りにある港しづか駅行きのバス停』
このように。

「わかった」
赤福は頷いて携帯電話を切って歩道を横断する、人の波に合わせて歩調は始め遅く滞りがちだったが、痺れを切らして前の歩行者を追い抜いていた。
（っとに、……あのボケなす）
息を切らすことはなく右方向に曲がっていくと、仲間が言っていた通りに店があり、付近には数人と人が列で並んでいたバスの停留所があった。そこへと行き当たっていた。
（説教じゃ、アホンダラ）
最後尾で、両腰に手をついて悶々と俯いていた。
（一発おみまいしてやろうか。目を覚ますかもしれない、あのミョーチンボクもやし野郎）
バスを待っている間が手持ち無沙汰なのか、赤福は悪口を開発していた。

待つと長く感じるが待ち続けている赤福に、また携帯で連絡が入っていた。うぴぴぴぴ。赤福の携帯の着信音だった。携帯電話を買った当初は予めに入っていた地味な黒電話の音にしていたのだが、周囲で仕事関係者は同じ黒電話の着信音にしていることが多かったため、赤福は自分のが鳴っているのかどうかが「わからん」と吐き捨て設定を変えたのだ、目覚ましのアラームかネコ娘の悲鳴かは分からない電子音が鳴るようになった。

携帯電話の相手は出ると、違った仲間からの連絡だった。
『ハアイ、元気。シマちゃんよ』
携帯の液晶画面には登録名、『仲間志麻伊』と表示されていた。
『キョーダイから話は聞いたぞ赤福』シマといった相手は耳元でうるさく声が大きかった。「仲間さんから何を」ややこしいので説明をすると、電話に出ているのは『仲間志麻伊』で先ほど電話で話していたのはキョーダイ、『仲間京大』である。ちなみに同じ『仲間』

であっても2人の関係は家族ではない他人だった。さらにどちらも京大出身ではなかった。

『「追跡システム」を使っているらしいが、もっと簡単に追跡できるぞ。教えちゃろか』

親切心を出して相手のシマは言っていた。聞いた赤福の眉がピクリと反応して、「是非」とだけ漏らしていた。

『鈴木の帽子、トンガリの繊維の先から特殊電波出てるから、拾って衛星でそっち（携帯）に送るわー』

それだけを言って、電話は切れていた。

11（勝敗）／過去

アドバンテージサーバ、野崎。あと1ポイントを取れば、ゲームに勝つ。

デュース、取り返したのでポイントが並んだ、あと2ポイントを取らなければならない。

アドバンテージレシーバ、相手にポイントを与えてしまった、次取られたら負けてしまう。

デュースアゲイン、取り返した、あと2ポイント、先取すれば勝つ。

アドバンテージサーバ、野崎。あと1ポイントである、サーブを必ず入れて、絶対に決めるのだと信じていた。「フォルト！」

フォルト、――失敗。打ったサーブが相手コートのサービスエリアに入らなければ、そう判定される。続けて同じくベースライン後方から再度のサーブを試みて打つ、これも外せばダブルフォルト、相手に1ポイントを与えてしまうのだった。失敗は1度までで2度目に成功しなければゲームは始まらないのである、庭球（テニス）の基本ルールだった。

「ゲームカウント5―6、野崎、サービスプレイ」

コート横の高台に座る主審が泉にサーブを打てとコールし、示していた。試合は1セットマッチ6ゲーム、5―5とゲームがタイで並んだため、泉か相手が先に2ゲームを取り5―7、もしくは7―5になれば試合は終了する。

大事な局面を迎えていた。このゲームを落とせば、泉は試合に負けてしまうのである。僅か1ポイントも許されない状況に陥っていた。面積およそ23．78×10．97mのコートには1人対1人、試合はシングルスで、相手からの攻撃（サーブ）を待って構えているのだった。

団体球技ではない庭球（テニス）はコートをリング戦場とし誰も手を貸さない、孤独な格闘技とも言われていた。

（次は取る）

さァこーい（さあ来い）と、サーブを打つ泉とコート外野に散らばったり固まっている応援人たちは掛け声を発して士気を高めていて、泉の華麗なサーブは反りの小さい直線的なカーブで対向側のエリアにとバウンドしていた。ぱこん、レシーバに打たれた軟球は、泉の真正面へと飛んできていた。

打ち返し、打ち返す。

相手の死角を突く、背面へと仕掛ける、だが追いつき球に食らいついてミスらない、ラリーは続いていた。

長くプレーをしていると疲労も浮き出て、何故足がもっと早くに動かないのと泉は何度でも自分の体力無さを呪っていた。ぱこん、ぱこん、ぽと。とん、ととん、と……。ネット際に放られた球に泉は間に合わなかった。

（く……）

ポイントは取られてしまった、相手の「よっしゃラッキー」という大掛け声が頭の上から被さっていった。応援も盛り上がっている、応援用に作られていた歌は部員に使われていた。「ナイスプレー！……島田！　……ファイオー！　……1本！」間に手拍子を含みながら相手校は纏まり、騒いでいた。

（次は取る）

泉はベースライン右から左へと移動し、カウント0―15、主審のコールが響くと、高く球を投げていた。

サーブが決まる、と思えばサービスエースにはならず、レシーバは打ち返し、またもやラリーは続いていた。泉の打った球がコート

の外でバウンドすると、「――アウト！」と結果は審判によって下されたのだった。

（次は）

カウント０―３０、泉の持つラケットのグリップに力は込められていた。手に汗もかいている、些細なことだが、それが大きなミスを誘うこともあった。次のポイントも取られてしまい、打点やタイミングがずれて調子がまるで出ていないことに気がつき始めていた。

普段の練習では確実に自分の得意なコースへと決められている狙い球が、思うように決まらないのだ、「０―４０」と構わず審判は下される。「よっしゃラッキー」と相手はガッツポーズでそしてラケットを高く掲げていた。応援も高揚し凄まじくなっていった。「ファイオー！」

泉側の応援団も負けずにフェンス越しで叫んでいた。「……野崎！　……ドンマイ！　……次ファイオー！」

カウントは０―４０、次にポイントを取られたら１セット終了で、試合も終了となる。要するに泉の負けなのだった。

泉にとっては最大のピンチが訪れたと言えよう。

（負けない……）

左手に球、右手にはラケット、両方を重ね合わせて、深呼吸をしていた。吐く息とともに肩の力を抜き、できるだけいつもの自分を思い出すように努めていた。マイペース、いつもの自分とはどうだったかと自問を繰り返しながら、落ち着いていった。

（……）

試合中ながら一度目を閉じて、何も考えない『無心』の感覚を取り戻していた。不思議と周囲の騒音は遠ざかり、泉の視界には手元の球とラケットしか存在しなくなったのだ、これが集中というものなのだろう。

孤独な世界だった。

「さアァァこォォオオーい！」

泉の声が辺りに響いている。

獅子の雄叫びにも似たそれは、放り投げられた球に向けられたものだった。意識を集中させていた。

校舎の昇降口に、生徒たちは集まり騒いでいた。１０段ずつ合わせて作られた階段を下るとグラウンド、下らず校舎に沿って道なりに行けば自転車置き場がある。部活の終了時間が重なり待ち合わせた者や帰宅前にだらだらと話に花を咲かせている者など、生徒は自由な時間を過ごしていた。日はまだ沈んではいない。

「あれ、泉ちゃんは？」

自転車と自転車に挟まれて座り込んでいた女子のグループがあった、そのなかのひとりが隣に声を掛けていた。

「さあ、知らない。教室じゃないの？　チャリあるし。帰ってないと思うけど」

「試合惜しかったなあ。泉ちゃんが負けるなんて珍しい。相手あの西中だよ？　何かあったかな」

「落ち込んでるのかな……帰り、どっか行ってウサ晴らししないー？」

「えー、疲れてるのに。でもまあいっか……」

ラケットやカバンは投げ出したままで、泉の友達は数人まだ帰る気はなく足も投げ出し、日が沈む頃になるまで動こうとはしなかった。

校舎に入ると人の気配はなくなり、暗さが目についてくる。廊下を抜けると階段、上れば教室、渡り廊下を歩くと見えてくるのは理科室、音楽室などの多目的室になる。

窓が開いていた。そこからはグラウンドが見渡せていた。
風が出入りしていた、照り光っている廊下を埃が走り、そこにいれば少しでも洗われるのではないかとそんな気分だった。爽やかで気持ちがいい。
泉は縛っていた髪を解き、汗を乾かすつもりで外から吹いてくる風に当たっていた。日陰ではないが別にいいと許していた。風が当たっている。
無人の廊下が今の泉には心地よかった。汗がひいて肌を冷やす、それも自然と受け入れている。

グラウンドに部活中の生徒が残っていて小人のように動いていた。高く遠くから見つめていると、泉の目から涙が一滴、始めは頬に痒みが、としか思わなかったが、流れていたことに自身が小さく驚いていた。「ふ……」
息が漏れていた。「う……」一回漏れると、溢れ出していく。「……ひく……」手で押さえようとしても止まらなかった、泉は諦めてしゃがみ込み、見づらくなって見えなくなっていく視界に任せていった。
（悔しい……負けて悔しい……）
何度でも。
（粘れたのに。……なのに！）

勝てる試合だったと思う心が油断を呼んだのだろうか。今から反省しても負けた事実は消えることがない、諦めるしかなかった。でも消えない、泉の記憶に根付いてしまって囚われることになるだろう。

「勝てたのにっ……！」

泉が叫んだすぐだった。

「女王が泣いてる」

無人のそこに誰かが立ち踏み入っていた。

１１（勝敗）／過去（後書き）

軟式の場合はカウントのポイントコールが０―４０とかでなく０―３とかと言っていた気がしますが、ゲームカウントの数え方と混同しないために分けていますので、あしからず。

12（拒絶）／過去現在

がらんとした校舎。閉め切った室内には人がいるのだろうが、開け放されている教室、階段、廊下、渡り廊下は無人だった。夕日が赤みを増してきそうな頃合いに、外にいた部活などを終えた生徒は帰るからと去って行っている。校舎が赤く染められていっても、人のいない空間は温度というものが感じられなかった。

塞ぎ込んで黙っていた泉に、近づいてくる男子中学生がいた。勝てたのに、と叫んだ泉は急に出現した外界からの『敵』に敏感に反応し、涙も隠せず振り向き驚いていて。

――女王でも泣くんだな、続けて言ったその言葉が泉をさらに窮地に追い込んでいった。

「穂摘……」

慌てて、付け足していた。

「先、輩」

気持ちの整理がつかず、取り繕うにもどうしていいのかが分かっていなかった。呆けて途端に泉の顔が赤くなり熱を帯びていった。

「捜したんだけど……お前ってよく勝手に消えるのな」

ヤッケを着た体操服姿の穂摘は部活が終わってもすぐには帰らず、わざわざ泉を捜していたとでも言うのか。何故そんなことを、と泉は聞きたかった。しかし躊躇する、屈んでいた体を起こしても目線は穂摘にと届かなかった。涙は先ほどから止まっている、拭いて、泉は穂摘を冷静に捉えていた。「……」

他にかける言葉が見つからない上に出てきそうもない。泉は、諦めにも似た表情を見せていた。「何で私に……」頬の乾いた涙の跡

を手でさすった。白い粉が指につき、払っていた。

2人を包む空間は赤い、じりじりと光線照りつける夕日、踏み込めば居た堪れなくなりそうな緊張感の漂うなか、それを打破したのは穂摘の方だった。

「試合に負けてだいぶ落ち込んでたって向こうの主将（キャプテン）が心配してたし、あ、ウチの女子主将な。お前は顔に出さないから、いつもそうやって周りに心配かけてるんだぜ、解ってる？　カバンもラケットも置いてどーこ行っちまったんだって、友達も捜してるぞ、今頃。落ち着いたら戻ってやれよ？　それから」

「？」

意味深に、泉を見てまたも『女王』と呼んでいた。

「いいだろう、女王に教えといてやるよ」

穂摘は一歩だけ前に出ている。泉は肩を引いて目の前の『敵』に耳を傾けていた。何が飛び出すのかを考えると非常に怖くなっていた。

「これまでずっとお前を観察してたんだけど。どうもあんた、気が強すぎる。周りが置いてきぼりだ。女王みたいな奴はよお、誰かが声でも掛けてやらないと、放っておいたら真っ直ぐ自滅するんだぜ？」

泉のなかで混乱が生じていた。気が強い、強すぎて、周りを置いていく？　そして、真っ直ぐ『自滅』する……勝負に負けた時のようなことを指して言っているのかと、泉は全身の血液が煮えたぎってくるような衝動にかられていた。ついに出た言葉が、

「大きなお世話よ！」

叫びだった。

顔を真っ赤にさせながら、勝てそうもない『敵』に吠えていた。自分でも意外だと認めざるを得ない叫びの大きさに、泉は恥ずかし

くて堪らなかった。なので穂摘を無視して走り横を通り抜けて行って、
振り向かない。
「泉！」
穂摘が最後に声を掛けたが、立ち止まることなく泉は逃げ去ってしまっていた。急に出たものが野崎ではなく泉、名前だった。「あ、やべ。言い過ぎ……」思わず開いた口を塞いでいる。

泉は穂摘が嫌いで、苦手意識があった。出来れば関わりたくはないと敬遠していた。なのに泣いた、泣いている所を見られた、しかも弱みを突かれたようで気分が悪い。
（涙なんか流すんじゃなかった、でも、勝手に流れてきた。どうしたらいいの……）
走りながら泉は「時間を巻き戻せたらいいのに！」と、空に叫んでいた。

「……で、巻き戻しますか？」
平たく、ヒューマは言っていた。「ええと……」隣に居た『泉』は、こほん、と咳払いをしていた。
数メートルは離れていた廊下の隅で、４つ目のステージだった一部始終を見終えた２人は、それぞれに感想を漏らしていた。「あれが過去の私……」自分を外側から見るということが、泉には奇妙にしか思えていない。他人ではなく自分、あれが自分なのだと自覚が遅いながらも多くを受け入れていった。
「一体何処が『失敗』なのですか」
納得できないでいるらしいヒューマは、腕を組んで泉を見て言った。

「『失敗』だよ……大っ嫌いな先輩に泣いてる所見られちゃったんだから。一生の不覚、一生の恥」

可哀想で無様だ。

泉は言いながら、いまだ立ち竦んでその場から離れないでいる穂摘に視線を向けていた。あまり容姿をじろじろと見る機会も関心もなかった泉は、初めて穂摘という一年だけ先輩の『彼』を直視する機会を得ていた。

なるほど女子のなかで話題に上がりやすいほど、体格も細くて引き締まっているし、何より人当たりもよくスマートにも見える、魅力というやつだと泉は思った。今頃何で気がついているのだろう、穂摘という人間は、もう既に。

この世にいないのであるから。

「穂摘……」

泉は、聞き届くはずがないと知りつつも、夢中で名前を呼び掛けていた。

その時である。

サッと空をきり、穂摘――彼は、振り向いたのである。

反応するはずがない呼びかけに、穂摘は返事の代わりに振り向いた。そして、『現在から来た過去にいる』泉と目が合う、ぶつかり合っていた。

だがそれも一瞬だった。

ブチッ。

……。

電気回路を切断されたかのような、『拒絶』の不快音がした。

13（再起動）／現在

泉と魔女っ子、2人を乗せていた電車は対向してくる電車との待ち合わせで長らくの停車をしていた。終点にも泉が降りる駅までにも、まだ遠い。

「は……」

泉は目覚めた。汗を大量にかいたせいで、黒い服の生地が肌にべっとりと付き放さず気持ちが悪かった。乱れた呼吸が暫く続き、心臓が落ち着かなかった。「大丈夫？」声が降りかかる。

「一体何が……」

ぜーぜー、と、胃か肺から座ったままの全身から、肩を揺らして調子を整えていた。泉は今現在の起こった事態がよく理解できていなかった、向かいに座っている魔女っ子に問うしかない。「何が起こったんですか」停車している駅名を横目で窓から確認しつつ冷静さを取り戻していた。

「ええと、たん……いえ、タイムアウト」

空（くう）を見た魔女っ子は、そう告げていた。

「タイム……あうと？」

どういうことだと、泉は納得がいかないでいた。

「もうすぐ降りるでしょ……だから。こっちで強制終了させたの」

体を起こして上体を反らせた魔女っ子は「ふう」と息を吐いて休んでいる様子だった。泉が目を閉じてゲームをプレイ中、魔女っ子は泉の状態に注目していたばかりではないようである。ソフトとは別に小型の本型端末機（黒仕様）をいつの間にか手に持っており、ホストコンピュータとこれでネットを通じて側面から監視していたようだった。しかし直接はゲーム内に手を下せず、開始後プレイ中

は何も出来ないことがほとんどだった。それを使って終了させたのだと言いたげに泉に示していた。
「ごめんねえ。びっくりしたね。でももうお仕舞いよ☆」
ニカッ、と歯を見せて魔女っ子は笑っていた。歯は艶々として白く、健康的である。「お願い……」
泉に変化があった。「お願いです。聞いて下さい、もう一度」前屈みになって魔女っ子の方へと乗り出していた。「およ？」
びっくり仰天だとオーバーアクションで口を尖らせていた。

「もう一度、ゲームのなかへ」

懇願していた。「どうして」魔女っ子の顔が引き締まり、曇っていた。
「もう一度プレイしたいんです」「だからどうして？」「会いたい人がいるんです」「それは無理。これは『失敗を修正するゲーム』であって、会いたい人に会うゲームじゃないの。舞台はあなたが世界をつくる。即ち『失敗』がないと、その、『会いたい人』には会えないわ」

泉は項垂れていた。まるで説教を聞いた子どものように、大人しかった。
「会える。会えるわ……だって穂摘は、私の『失敗』のせいで――」
懺悔のようだった。目に焼き取り憑いてしまって離れてくれない光景が、泉を苦しめている。単に振り向いただけなら良かったのだ、出会えた過去の穂摘のように。その後が問題だった、泉にとって強制終了は救いだったのかもしれなかった。何故なら泉は。

（あの時に声を掛けたから。穂摘を呼んだから。だから振り向いて、渡り切れるはずの横断歩道を渡り切れなかった。赤信号だった、あの時、右折した車が突っ込んできて。そして――）

穂摘は飛んだのだ、と。

泉は全てを見ている。

『真っ直ぐ自滅するんだぜ』……泉は前を見ていた、そうしたらこうなった。

「会えるはずなの。『失敗』なんだから、会えるはずなの……！」

泉の混乱を掴んだ訳ではないが、魔女っ子の持つ端末とソフト『失敗修正マイライン［ＦＣＭＬ－Ｘ］（仮）』は次の入力はまだかと待機状態だった、ぽーん、持つ端末どちらか一方で起動音がした。悲しくもそれを切欠（きっかけ）にして泉の頬に涙がこぼれていった。「お願い……」

過去に見た穂摘は泉に何をしようとしたのだろうか。強制終了は本当に救いだったのか、泉を過去から現在へと帰すための。ゲーム中ではない事故に遭った穂摘が重なり、泉にはここが絶対に自分がいるべき場所なのかさえ疑い存在が危うくなっていた。

魔女っ子は……折れた。

「……分かった。でもね……」

見るに見かねたか、魔女っ子は泉の要求を受け入れる格好をとっていた。しかし忠告、とばかりに真剣な顔は崩れる気配を見せず泉に詰め寄っている。

「守って。『さっきと同じこと』を、しないように。もししたら、このゲームは端末リセットが掛かる――現象が、起こる可能性がある」

睨みをきかす怖い顔だった。

「……？」

それを見た泉には、怖さが伝わってはいないようだった。青ざめた顔だが理解は出来ていなかった。

「ここへ戻る直前にしたことを、しないでと言っているの」

穂摘に声を掛けたこと？　泉はそう解釈をしていた。もし掛けたら――。

「……行ってらっしゃい」

魔女っ子に微笑がない。目を閉じて再び眠りのようにリラックスモードに入った泉には関心のないことだった。早く、早く会いたいのだと、座席にダラリと体をもたれかけさせて楽にして、時を待っていた。ゲームのなかへと抵抗はなく為すがままにである。すると停車していた電車はやっと、『大変お待たせ致しました、間もなく発車致します……』とのアナウンスのもと走り出す準備にかかっている。

もう一度会わせて欲しいと。泉はまたゲームを開始した。一度体験したことを、同じことを体感しに逆戻りしている前向きだった。何かがおかしい、でも逆らえなかった。

『守って。「さっきと同じこと」を、しないように』――

再起動を始めたゲームは正常にメニュー画面へ、そして各種設定、そしてスタートする、泉は、プログラムの波へと飲まれていっていた。

『始めはダウンロード、一方的ではあるが、泉に必要な世界情報が

与えられインストールされていく。それからは情報が一括ではなく最低限容量の情報だけがリアルタイムで要求に応じストリーミングされる。ライブとオンデマンドの中間的性質を持つ言わばリクエスト方式で、全てはこのソフト１本でまかなえられるそれは、催眠術に酷似していた』

『失敗修正マイライン［ＦＣＭＬ―Ｘ］（仮）』は、あくまでも『ゲーム』だった、悪魔でも。

泉にとっては、そう、『夢』を見ている感覚だった、印象強き深く記憶の残る脳、失敗は成功より消えずに。
泉の前に小さな機械が置いてあるだけだった、ソフトではない。名付けのない開発中の新しい物だった。

＞ｉ１２６２５―１７７５＜

リターン・トゥ・マイライフ。

１４（バグ）／過去現在

『忘れないで。これは、「ゲーム」なの……』

深く暗い意識の谷底に落ちていく泉に最後、声を掛けていた。たゆたう泉にそれが果たして聞き取れたのかは、定かではない。泉が自分の過去の再現を望んでいた場面（シーン）は無論、穂摘が事故に遭った時だった。しかし簡単にゲームは泉の要求を呑んでくれるのかどうなのか……強制終了で途中リタイアをした反則を経て、ゲームは再起動、『再現』を試みていた。泉に情報がカスタマイズされていった、『安心度』は、０％からである。

端末リセットやらが起きる前、絶対に振り向くはずのない『彼』は、振り向いていた。泉の呼びかけに反応出来たのか、したのか、偶然でそう見えただけなのかの謎が残る、泉には奇跡のようだったが現象として起きている。起きないべき現象が起きてしまう、プログラムの世界ではこれを。

＞ｉ１２６２６―１７７５＜

バグと言う。

明らかに、バグだった。起きない現象が起きたために続行不可能だと発生した端末リセット。泉には知らされてはいないし説明されても受け入れられないだろう、奇跡、で片付いていた。

（穂摘どこ……）

暗闇の視界に一筋の光が差し込めていた。

気がつくと泉は、美術館内らしき場所にいた。と、いうのも、複数の絵画が壁面に並び、囲まれるようにして天井高いホールの中心に泉が立っていたのだった。絵画や、点々と展示されていた彫刻を鑑賞しようと人が列を成しており、一度も止まらずにホール内を横切るには困難だった。泉の姿は見えてはいないし声も通じない、ただし泉の方からは触れることが可能らしい、時々に人と接触しそうになりながら、上手く人混みを避けていた。

素早く、現在の泉は過去の『泉』を見つけることが出来ていた。泉の記憶によれば8歳、たぶんそうだろうと予想を立てていたが、館内で迷子になっているらしかった。きょろきょろと辺りを慌てている様子で早足に進んでいく過去の『泉』、背中には小さな赤いリュックサックを背負い、薄く黒のチェックが入った可愛らしいワンピースを着て、頭には片方だけワンポイントの小花がついたピンを使い前髪で留めていた。

泉には分かっている。迷子になったのだ、そして。

「あ」

どん、と。8歳の泉はよそ見をしていて、並んで壁の絵画に目を奪われている人々に体が当たってしまった。その反動で、近くにあったオブジェ……周りを立ち入れられないように赤く太めのロープで囲まれてはいたが、小さな『泉』の体が倒れてロープに引っ掛かってしまった。いや、違った。

倒れる寸前になって、『泉』の手を取り引っ張ってくれた人物がいた。現在から来た泉、だった。

泉が自分で自分を助けたことになった、手を掴まれて倒れずに済

み、『泉』は「？」と手の平を広げたり首を傾げたりと動作を繰り返しながら、何処かへと歩き出して消えて行った。
「これでいい。でないと、この後大変だったし……」
難を逃れたらしい展示されていたオブジェは、見た目が太陽の塔にとても似ており作品名が『芸術はドッカーン』だった。何事もなく作品は無事である。泉は僅かだが、ほっと胸を撫で下ろしていた。

安心した泉の頭上で音が鳴っている、どうでもいいようなラッパの音だった、しかも何故か2回鳴る。上で掲げられた『安心度』の数値は、『３４％』を記録していた。とりあえずの1ステージクリア、泉はそこで「あれ？」と思い出していた、変なことに。

案内人のヒューマがいない。

おかしいな、と思って考えてみても、泉には分からなかった。

ステージをひとつクリア出来たと確信をしているものの、次のステージに移るためにはどうしたらいいのだろうと泉は困っていた。仕方がないので、絵画が並ぶギャラリーの人混みの間を縫うようにして歩いていた、じっとしていられなかったのだった。気持ちは、すぐにでも飛んで行きたいと焦っていた。
（こんな所で迷っている場合じゃないの……早く次へ……）
自分が助けたつもりのあの小さな8歳の『泉』は、はぐれた先生や生徒たちの所へと戻れただろうか。過去では結局、戻れたのだからきっと大丈夫だろうと今の泉は思っているが、見て確かめた訳でもないので『たぶん』『恐らく』である。
時の回廊、そんな歌か詩がなかったか。絵画の前を歩いていると、自分がさ迷い人の如くに思わせて、ここからいつ抜け出せるのだろうと不安になっていった。

（早く次へ）

不在の案内人だったが、関係のないように突如泉の視界がぐにゃりと歪んでいた。「わ……」そして、キュルルルル、と、テープの滑る音が走り出していた、何度か聞いてはいる泉だったが慣れてはくれていないらしい、それは頭痛を訴えている患者だった、あまり聞きたくはない。

ああ鬱陶しいだけだわアナログなんてと、身を強張らせながら泉は、思っていた。

次に泉を襲ってきたのは、水だった。ばっしゃん、ごぼぼ。泉の体に衝撃が舞い込み、しかも息をしようにも水が肺に入ったために吐き出し苦しく、パニックになっていた。どうやら水のなかにいるらしかった。

（どういう……こ……と……）

意識が遠のいていく。手足でかいて、もがいてみるが、状況がよく分かっていない。悲鳴を心のなかで上げていた。

（助けて！）

手を大きくかいて、かいて、かいて。掴まれる所がないのか何とかならないのかを探していた。何ともなりそうではなかった、絶体絶命だった。

（助けてええええ！）

自分がこんな目に遭っているのは何故なのか、『過去の私』はどうした、何故『過去の私』ではなく私がこんな苦しい目に……と、考えている余裕などある訳はなく、ただ力だけが空回りして消耗していく泉の暴れる手を取ってくれたのは、強くたくましい腕だった。

力で体が浮き上がった感じに、泉は苦境から『脱出』に成功した

のだった。「ぶはっ、が、ぐ」水面から押し出された重力か浮力を感じ、次に打ちつけたのは地面だった。
「大丈夫か、君！？」
大人の男の声がぶつかっていた。「……げほ、がは、ひく……」口から水を吐き出し、熱い地面の表面と上から照りつけてくる熱を浴びながら、泉は呼吸を確保していた。鼻が痛くて堪らなかった。
「……？」涙目になりながら見えてくる視界で確認していった、ここは半ば広い、プールサイドであると。過去の泉が何処かにいて傍観している訳ではなく今『現在の』泉が体験していた。

「君、足が滑ってプールに落ちたんだよ。どこにもぶつけてないかい？　気がついて良かったよ」
水に浸かったままで泉を引っ張り上げてくれたのだろう、話し掛けてくる見知らぬ男の方を向くと、泉はお尻をついたまま呆然として「ありがとうございました……」と自然に言った。みるみるうちに思い出していったらしい、水に溺れたことがある思い出、過去、あれは中学生になったばかりで真夏も近づく、民営プールでの出来事だった。思い出していた、だが。

溺れた泉を助けてくれた男性にお礼を言った覚えがない、今のように呆然として言葉が出なかったと覚えていた。だから今、言えて良かったのだと改めて気がついて泉は嬉しくなったのだった。
男性もにこやかに「うん。気をつけてね」とあははと笑いながら言っていた。水から上がろうとして端に手を掛けていた。

「あっ……」

泉は覚えていた。なので、急いで目を閉じてその場を離れて行った。大急ぎで走り、逃げるように去って行った、何故ならば。
「ん？　どうしたんだろう？」

水から上がった男は不思議そうに泉を目で追っていたが、男はすぐに気がつく。「げげ」勢いよく泉を助けようとプールに飛び込んだせいでもあるだろう、男の水着パンツは脱げてしまって無かった。

ステージは、一応と進行していた。

・・・

『3番線に、電車が、到着します。危険ですから、ホームの内側まで、お下がり下さい……』

アナウンスが構内に響いていた。聞いても聞いていなくても、乗員乗客は線路から離れ気味に動き言うことをきいていた。自販機で飲料を買う者、痴話に世間話にと楽しそうに笑っている団体、早歩きのサラリーマン、暑そうにベンチで寝そべっている若い兄ちゃんや携帯でアプリゲームをしている者、など、無秩序に人が散り散りに過ごしていた。

電車が来ると、列に並んでいた者は読んでいた本や携帯電話を閉じたり置いていた鞄を持って出迎えて、乗り込む用意をし始めていた。

そのなかで、最後尾に並んだ若い男が、流れてくる電車の窓をひとつ、ひとつと睨みつけてチェックをしていた。どうも湧き上がっている怒りを抑えているようで、湯気は立ってはいないが、触ると火傷をしそうで大変近づき難かった。

「見つけたぞ。……鈴木」

プシュウウウ。電車は到着し、降りる客を優先でドアが開いていった。

１５（無茶）／現在

目的地や対象物を点とするならば、そこへと向かって現在点からの最短線を引く。地図上では、直線ではあるが、実際に移動するには直線であるはずがなく傾斜や気候、交通事情等も視野に入れなければならず、直線＝距離であっても他に時間を計算に入れねばならない。

だがそれは、対象が『動かない』場合に限る。

「何してる」

重量のある声が、仁王立ちでいる彼から発せられていた。ライトベージュのジャケットが会社用の上着で、胸ポケットに『赤福』とロゴが刺繍されていた。長袖は関節まで捲り上げており、手には携帯電話を握っていた。骨ばった細い腕には血管が浮いている。

「何をしていると聞いているんだ、鈴木」

電車に乗り込むと女性の事務声でアナウンスが入った、『間もなく発車いたします』……出入り口に立つ乗客ばかりで、奥の座席横に立つ者は赤福社員の他、数人程度だった。トーンの低い、怒りを含めた声色か、それとも彼にとってはこれが地声なのか。とにもかくにも、赤福は見た光景を前に全身が震えているようだった。向かい合わせで座っていたのは、魔女のコスプレをした若い女性とうたた寝をしている女子中学生である。

赤福社員の血走った目は魔女コスプレ女性を貫いていた、魔女っ子のことではあるが、驚く様子も楯突く様子もなく赤福の痛い集中攻撃を受けとめていたようだった。

「バグは数件、見つかったよ……多すぎて嫌んなりそう。仕方ない

よね……」
力無く言っていた。
電車に乗り込む前に若き天才カナン・ベルと言っていた時の元気さからでは想像も出来ないほどに、極端で沈み込んでいる鈴木社員の傍には、小型の端末機が折りを開いて電子ブックのように置いてあった。電源は点いていて白く点灯、それから、うたた寝をしている女学生とは、つまりは泉のことだが傍らには問題のゲームが起動されていた。
「他に言うことはないのか、鈴木。いつも一方的だな。会話をしろよ、ちゃんと。何でここが分かったかとか。俺が何しに来たのかとか。その子は誰だ？」
赤福社員の関心は初めて泉の方へと向かっていた。とても楽にして手足を投げ出し眠っている泉、若いくせに黒服か、似合ってないがと一瞥し、鈴木の方へと戻ってくる。肝心の鈴木はわざとらしくそっぽを向いて答えていた。

「ボクを連れ戻しに来たんでしょ。別に驚きはしないもんね、あっちには仲間一家がいるじゃん。どうせこのトンガリ帽を辿って来たんでしょ……来るって分かってた」
顔は赤福から背けてはいたが、被っている尖った帽子を指してちゃんと答えていた。
「ＪＲのローカル線に沿って移動してたみてーだからって、航空（画像）からの展望（情報）で追いつけたけど。道理でチンタラしてるなと思ったぜ馬鹿やろう。お前は子どもか、何が『ボク』だっつうの。お迎え待ってんじゃねーよこのヒョロハゲ」
続けて、罵声が飛んでいた。ヒョロハゲには反応しなかった、ちなみにハゲているのは、ひとつ向こうの座席で新聞を読んでいたサラリーマンである。聞いてはいない振りをしていたのかもしれないが軽く咳払いをしていた。

「この、……馬鹿がッ！」
赤福はまた、気持ちよさそうに寝ている泉を見て鈴木に、言っていた。

電車は彼らが話し込んでいる隙に走り出していた。赤福は仲間たちの助言で発信源であるトンガリ帽の特殊怪電波を追って円滑に鈴木を捜し出し、追いついた。もし会社にある従来の追跡システムを利用していたなら追うだけは追えても捕まえることまでが可能だったのかは謎というより無茶適当だった。赤福も分かってはいたが、気が立っていた彼に他に手段や余裕はなかったのだろう。

従来の認識システム、五感認識。問題のゲームにもおまけ的な位置づけで組み込まれてはいるが、その五感情報は膨大で、扱えるのかは俄かには信じ難かった。それを可能にしたのは仮想化、ＷｉｎｄｏｗｓのＯＳをＭａｃのＯＳの上で動くようにしたようなものだという。これにより複数のＷｉｎｄｏｗｓ用のものが、Ｍａｃ上で使えることになる。ＭａｃのくせにＷｉｎｄｏｗｓのように動くに見える……こうして偏った狭い考え方からの発想の転換は広がりを見せ、『不可能に思えるものを可能にした』技術となって『魔法』は――解けていくのだった。
もしや開けゴマ、で開いた扉は音声認識システム仕立てのオートドアだったのだろうか、そんなことを言ってみる。

「……ごめん、福……」
情けない声を出したのは、鈴木だった。帽子を取って、膝の上に載せていた。
「どうしても我慢できなかったんだ。早くバグを処理したくて、そのためにはテストしてくれる誰かが必要で……誰でもよかったんだ、でも出来れば中学生がいい、夢見がちな疑い知らずの扱いやすい子

ども、大人じゃだめだ、純粋な結果が得られない。幼稚すぎてもだめだ、勝手なことして暴れたら困る。だから……」
鈴木は泉を申し訳なさそうに窺っていた、そして。
「でもどうせきっと、このゲームは完成したって。……発信も発売もされない」
悲観的なことを呟いていた。赤福の眉間にまた再びに皺が寄る、カチンと、頭のなかで引っ掛かりが生じていた。引き金を引いたようだった。
「何でそう思う」
「危険だから」
即答が返り、赤福は面食らっていた。思いのほかダメージを受けたのか、赤福は暫く黙り動きが停止してしまっていた。窓の外では橋にさしかかったらしく電車は川の上を走り、建物が視界の隅に追いやられたせいもあって青空が広がっていた。

赤福は何度でも怒りを我慢してきた。彼は大人だが、我慢することが大人なのではない。怒るべき時に怒り、激励出来るならば行の動、必要ならば考。赤福の心中に以上のことが渦巻いていてとても苦しかった。
だが青空が見えたのが救いだった。彼を本へと返してくれたのだろう。

「今更お前までそう言い出すのか……いいか。このゲームはな、次世代とかじゃなくて次世代、その次へと向かっているかもしれないんだぜ。こちらが用意した舞台や世界をプレイヤーやユーザーが提供されて体感するんじゃない、与えられてんじゃない、個々の人が持つ世界観価値観そのままを再現リアリティによって『再体験』するんだ。おかえりなさいで今日は、だ。新しいものを求めるより基礎基盤、友達家族親戚先輩後輩同僚仲間他人教師、試練誘惑質素計略お涙頂戴、古典平和秩序未来。周囲と古き遠くに退いた本質を見

直そう――俺たちに与えられたテーマだ。それをシステム化してゲームで広めようと俺たちは頑張ってる。

失われつつあるものを取り戻すために」

＞i１２６２３―１７７５＜

一定の速度で走っていた電車が、カーブに差しかかった。線路の上を減速で通り抜けるつもりでいる、安全であることが当然、当然であることが安全と、電車は、規則を守り運行していた。

（失われつつ……？　例えば、どんな）

鈴木は無言の訴えで赤福に聞いていた。なら無言でと、赤福は答えを捻り出している。

『例えば――「名前」だ。歴史は古く、今は意味を失いつつある』

時の経過は残酷にも、本質からは遠ざかる。携帯電話は携帯だけを残して電話ではなくなりつつあることに気がついていても誰も止められないだろう。

開発に携わる若き男は吠えるのだった。

「お前は忘れるな。何でそのソフトをつくろうと思って、何故こんな無茶をやらかしたのか。――思い出せよ、――忘れるな！」

直後に、電車はトンネルへと侵入していった。

16（要求）／過去現在

窓の外はほぼ暗闇になった。時折、壁の荒模様が横滑りに通過していた。耳の鼓膜を圧迫し不自由さを感じながら、トンネルのなかは外界とは遮断された異空間を演じていた。

窓は車内の点灯を映して乗客の影をも映している。吊り革にも座席にも支えを使わず堂々立っていた赤福社員は、景色のない窓を遠く見つめる視線で黙っている、鈴木という座っていた社員を見下ろして、返事（リアクション）を待っていた。忘れるな――何でそのソフトをつくろうと思って、何故こんな無茶をやらかしたのかを――忘れるな。

満を持して、鈴木は赤福に振り返った。

「うん。……思い出した。俺最強、って、びっくりさせたかったんだよね！」

清々しい顔で、鈴木は答えてそして……口元をほころばせていた。

「そうだ」

伝染したかのように赤福もつられて笑っていた。始めから、新しいものをつくりたかった訳ではない。そんなものは後づけだった。

開発は、ひとりの小さな願いや発想から始まる。過去に戻れたら。でもどうやって？

気が済めば満足が得られ楽しめる、それならばゲームだ、ゲームをしよう。ゲームなら、つくるのは簡単だ、知識があれば技術で可能だ、それではトコトンとやってみようじゃないか――

こうして従来の技術を模索し実現へと向かってソフトは形を成していった、それが『リターン・トゥ・マイライフ』であり、人も機械の一部となってゲームのシステムに参加する。人がアバターのよ

うなキャラクター人形ではなく実際に『再現体感』する、本物に限りなく近いシミュレーテッドリアリティ。だがこれを実現可能にするには問題があった、なかのひとつが『現実への再帰』である。
例え技術的に可能であっても、それがネックとなって話が進まない。無事に現実へと戻って来れるのかどうなのか、鈴木は泉を見てそれは無理だと実感していた。

「……で？　この子はどうなったんだ。どんな状態でいる訳だ？」
赤福の気がかりはそこだった。責任、という言葉が重くのしかかっている。鈴木は懸命に現状を説明していた。
「それが、ほんの数分前に起こったバグで一度こっち［現実］に返ってきたんだ。でもどうしてもって言うから、リトライしてる。同じことをゲーム内でしたら同じ現象が――端末リセットバグがかかる可能性があるから、続行したければ同じことをしないようにって、言ってはあるんだけど……」
赤福の顔が曇る。鈴木を責める訳ではないが、下唇を噛み締め苦渋を浮かべていた。
「端末リセットを起こしてくれた方がありがたかったな。とにかくゲームを終わらせて戻って来させないと。案内人のヒューマは使えないか」
鈴木の顔も暗く、そして無になり必死で考を練っていた。
「たぶん無理だ。プログラムを書き直さないと……今やってるゲーム中、隣でソースを追っていたんだけど、途中で一文字間違えてた。案内人が消えちゃったかも」
「おいおい」
何してるんだと赤福は頭を抱えていた。
「でもね。きっと大丈夫だよ。絶対大丈夫かと聞かれても１００％の保障はないけど、この子が返って来たタイミングの時に手は一応打ったからさ」

鈴木の……トンガリ帽を白昼堂々と被った開発者の言うことは当てになるのだろうか。もしここに『信用度』を量る測量器でもあったなら是非、数値で示してみたいものだった。

・・・

もはや正常に作動しているのかも怪しいゲームは、進行していた。過去を見ている現段階での『安心度』は８２％、あと１回の失敗修正（リア）で、終了するはずである。

過去に来たことのある他校のテニスコートに立って、泉は空を見上げていた。

（何か、空（むな）しー……）

中学２年の春の練習試合、泉は負けた覚えのある相手に『勝って』、際限のない空しさに悲しくなっていた。こんな無意味なことってない――勝って嬉しいのは瞬間だけだ、あとはしてしまったことへの後悔だけ。泉はそう思って、笑えなかった。

おかげでステージは修正成功と判定し『安心度』は８２％まで上昇した訳だが、泉には納得がいかなかった。この『ズレ』は一向に埋まらないでいた。泉の要求は送信されている、受け入れたサーバーは泉とゲームに返している。世界は新たに書きかえられて、泉に合った世界になる。与えられた世界と要求した泉の世界との駆け引きは、一元化を繰り返し繰り返し、それによりバグを生んでいた。

開発者は嘆くだろう、『終わりがない』と。始まりは、終わらなければ終わらない。

案内人は姿を現さず、次のステージへと進んでいった。

雨が降っていた地へと。

曇り空の下で、激戦は繰り広げられていた。夏休み前にあった、中学3年生にとっては引退試合となる最後の地区大会男女決勝戦だった。地区で勝てば県大会、それは泉の通う学校のテニス部史上初となり、野球部やサッカー部ほどの団体的メジャーな騒がしさではないが、応援もそこそこに盛り上がりを見せていっていた。

高さがあるフェンス越しに女子も男子も関係なく自分の学校であれば応援し、決勝ともなるとその人数は集まって増えてきて、横に並んだ列は隙間がなくなっていた。掛け声も相乗効果で膨れ上がり、盛況さはプレイ開始直後と比べて鰻のぼりに大きかった。特に勝敗を決める1打とあっては、盛り上がりも最高潮へと進むのだろう。まさに今がその時だった。

穂摘がサーブ側で、握りしめた球を見つめていた。

この1球が全てを決定するのかもしれないと思えば、緊張して決断がつき難かった。サーブを打てば……レシーバが勿論と球を打ち返し、ラリーが続くのだろう、相手は実力者だ、運だけで勝ち上がってきた訳ではなく日頃に練習して培った努力でここまで勝ち上がってきた自分と同じ中学3年生なのだと、言わずとも知れる相手に穂摘は気負いを感じていた。気で負けそうになるな馬鹿めと、何度目かになる自分への叱咤を掛けていた。だがそれで調子を本来に戻すには、天候が邪魔をしている。

小雨が、パラついてきていた。雨模様は数時間前から確実で、いつ降るのだろうかと大会主催側も生徒も顧問先生たちも心配をしていた。雨が酷くならなければ試合を中止にすることはなく開始はされ、幸か、決勝まで平常通りに進行していた。

雨が強くなっていった。小雨だった粒は大粒に、生徒たちの着て

いるウェアを雨色に染めていった。ぱたぱたと屋根の国旗や校章旗が風で靡き、それが、来たる結果にさあ来るぞと暗示をかけているかのようで、穂摘の決心を鈍らせていた。

集中に欠けているのだ、遠くのものが耳に聞こえているのがその証拠だ、他を見るな意識を集中するのだ、……

穂摘は息を整えて、このままじゃ埒も明かないし雨がこれ以上強く降る前にと、球を勢いよく高く放り投げていた。いつもの調子のはずだった。

だが、いつもの通りではなかったのだった、天候が――。

雨粒が穂摘にとっては最悪のタイミングで、目に飛び込んでしまっていた。球の位置を瞬間的に見失い、振り上げたラケットとの相性悪く球が何とかガットの隅に当たっても、全然と狙いとは違う方向に飛んで行ってしまった。

ネット向こう、相手プレイヤー側のサービスエリア内に球が着地しないと、審判に下される判定は無論、「ダブルフォルト！」――だった。「ゲームセット！　アンド、マッチウォン、バイ、……」

試合終了。サーブは2本目だった。観客による大歓声で包まれていた。

17（声）／過去現在

雨は、どしゃ降りになっていた。
決勝を終えた大会は、設置されていたテント内で表彰式が応急的に行われ、何とか形だけでも終えていった。テント下から各校の生徒たちは出るに出られず、暫く雨の様子を見ての行動となっていた。そのうちに小降りになるだろうと思いながらである。時々に、ゲリラ豪雨のように集中的に降りかかる時もあった。

男子決勝戦を見終えた『泉』は、友達と試合について語り合っていた。
「先輩残念だったけど、凄くいい試合だったよね。あーあ、雨が降らなきゃなぁ……」
「たぶん調子が崩れたんでしょうね。残念だったけど」
「本当に。いつもの決めれるサーブが決まらなかったっていうか。相手もしつこかったけど、でも……あーあ、本当に惜しい」
友達は何度でも「悔しい」を繰り返していたようだった。泉も、まんざらではない。素の表情は崩さず、ペットボトルのお茶を飲んでいた。雨は少しずつ勢いを緩め、細くしとしとと大人しくなっていった。
「止みそうかな」「まだわからない」「今のうちに動いといた方がいいかもね」
『泉』たちだけではなく、他の生徒たちも男女関係なく同じことを考えたのか、小雨になった途端にテント内から出て走って行ったり、隣へ移動したりと動きを見せ始めていた。『泉』もそうしようと周囲を見渡し、出て行こうとする前に気にかかったことを思い出していた。
「先輩は……？」

先ほどまで噂をしていた話中の彼、穂摘の姿が何処にもない。
おかしいな、と『泉』は思ったが、とにかく雨を避けてテント内から抜け出して行っていた。

先生、穂摘がいません――

泉と『泉』がそれを聞いたのは、テントから抜け出した直後だった。どちらの泉も驚き声がした方に注目していた。『穂摘先輩がいない？』……泉は懸命に過去を思い出し、『泉』は立ち止まって考えていた。
聞いていたのは穂摘とは同級の、彼の友達だった。試合終了直後にはいたはずの彼の姿が今はない、心配になって、といった所だろう。雨でバタバタとしていたせいでもあって、試合に負けた穂摘のことは目が誰も届いてはいなかった。
（おかしい。変だ、先輩らしくない）
（確かあそこだ、早く。早く行って。『泉』……！）
２人の泉と『泉』の意識は高まっていた。泉の前にいる『泉』を、どうにか早く連れ出したかった――泉は、『泉』の耳元で囁いていた。『こっちよ……お願い、こっち』そして手を引いている。「……！？」過去の『泉』は強引に引っ張って行かれている奇妙な現象に、頭が真っ白だったに違いなく……悲鳴を上げていた。「きゃあ！」泉はシマッタ、とばかりに慌てて体を押し離していた。ばしゃ。『泉』は、転んでしまっていた。幸いにもぬかるみの上ではなくコンクリートの上でコケたため、濡れてしまってはいたが泥だらけにはならずに済んでいた。

そんな押し問答がありながら、過去の『泉』は穂摘を捜しに独断で走り出すのである。泉にとっては非常に間怠（まだる）っこしかった。自分の姿が相手に見えなければ声も届かないなんて幽霊みたいじゃない

かと思っていた。幽霊なんてものは、このように時空の狭間でさ迷ったようなものなのかもしれない。
泉は、この世界の住人ではないのだから。

穂摘の持ち物がない。

それが、『泉』を校外に出させた理由だった。『泉』のとった行動とは、まず、穂摘の同級の友達に尋ねたことから始まる。「荷物はあったんですか？」聞かれた同級はそういえば、と初めて気がついたようで、調べてみると所定のロッカー等に置いてあっただろう荷物は捜しても無かった。
じゃあ、先に帰ったのでは？　という可能性が浮かび、「辺りを捜して来ます」と言って、『泉』はウェア姿で合羽代わりに薄手のヤッケを着て行っていた。

校舎を出て坂道を門や壁に沿って下り、四つ辻や大通りを何度も突き抜け最寄りの駅へと向かって走れば、見えてくるのが捜していた相手、穂摘だった。頑張って止まらず走ったおかげで追いつけたらしい『泉』は、街なかにも近い賑やかになりつつある交差点の横断歩道で信号待ちをしている彼の背中を見つけていた。人が数人おり、肩を並べて傘もささずに立っている。ラケットやカバンを肩から提げていたので目立っていた。
（穂摘先輩……何で勝手に先に……）
見つけたと同時に足が止まっている。安心していて、息を整えようと肩を揺らしていた。

過去の『泉』は思う、いつも周囲には人が、友達がいて、真面目ではなく遊んでいるように見えても、後輩にまでちゃんと挨拶してくれている、人を選ばずに分け隔てなく話を聞いてくれている。愛

想がいい、面倒見がいい、部活の後輩でしかない関係のない泉にも……それが、泉の知る穂摘のあるべき姿だったであるはずなのに、何処かがおかしい、きっとおかしいと感づいていた。
いつも周囲には気を配っている先輩が、どうして先にひとりで行ってしまったのか。まだ解散の集合も掛かっていないのに何故なのか、穂摘のとった行動とは、と……。

『泉』も泉も、かつて自分も試合に負けた時の心境を思い出していた。
（泣きそうになる時……）
思い当たった時に、迷いが生じていた。即ち、声を掛けていいのか、悪いのかを。
（もし笑顔じゃなかったら）
充分にそう考えられていた。試合に負けた直後でも穂摘は愛想で返してくるだろうか、自信はなかった。
（先輩……穂摘……）
通常の練習試合なら負けてもたいして悔しくはないかもしれなかった。でも今回の場合は違う、県大会を賭けた決勝戦だったのだ、応援や期待が凄まじかった、さらに穂摘たち3年生にとっては最後の引退試合、そう、――次が無い。
（穂摘！　穂摘！　……穂摘！）
雨粒が泉の体に侵入していった。
もはや涙かも判らない濡れに濡れていた顔で、穂摘から目が外れなかった。

（穂摘！）

叫んだのは。

「穂摘！」

どちらの『泉』だったのだろう。

忘れてはいけない忠告が、音で空に浮かんでいた。

忘れないで。これは、――なの。

18（バージョンアップ後）／過去現在

もしゲームに出会わなければ。電車は、泉を過去への旅へと発車することなどなかっただろう。乗り継ぎもせず、泉は眠っていただけだった、魔女の夢を見ながらに。そして……

その旅は、間もなく終着駅を迎えていた。

・・・

手前のカーブを曲がって傾斜を滑ってきた白の普通車は、信号通りに目視進行して、右折しようとハンドルを切っていた。対向して来るトラックの追尾をあまり確認せずに、坂道の下りを流れるようにしての交差点進入だった。トラックの陰まで注意をしていなかった。

人がいたのだ。信号ばかりに気をとられトラックが行ってしまったすぐに、人が視界に入らなかった。急いでブレーキをかけたつもりが、それは間に合わなかったのである。キキキキキ、

ドン。

銃声でもしたのかと誤解しそうな、衝撃音が辺りに響き渡っていた……

（ほづ……）

か弱い声は、泉のものだった。過去の『泉』ではなく、現在の泉の方の……ただし。

ブオオオ……

泉をはねた自動車は、何も無かったというのか、突っ切って過ぎ

去って行った。飛んだのは、穂摘ではなく泉だった。『同じことをするな』と言われていた忠告を無視ではなく忘れてしまっていて穂摘の名を呼んでしまい、さらに路上へと体は飛び出していた。現在の泉の声はこの世界の誰にも聞こえるはずがないのが本当で、声の通じなかった穂摘は車にギリギリに当たらず横断歩道を渡り切って助かっていた。しかし――。

飛んだのは泉だった。右折して来たのは去ってしまってもういない自動車1台限りで、後追いはない。そして、はねられて体が飛んで落下し着地したのは有難いことに、歩道だった、他の自動車に轢かれなくて済んでいた。

（……み……）

ショックで、思考は働いてはいなかった。空が上にあったために仰向けに倒れていることは理解出来ていたのかもしれなかったが、泉の意識がそこにあるだけだった。

（し……の……）

信号が青に変わると、人や車両は動き出していた。倒れている泉を助け起こす者は当然としておらず、存在自体が認められてはおらず、泉が何を呟こうとも世界の住人には無関心で関係はなく、放っておかれたら予想される未来は恐らくひとつ、それは死、だった。

わたし……しぬの……ね。

周囲が動き出したおかげで音や光影といった情報は無防備な泉に入り、段々と自覚していった。穂摘をきっと助けることが出来て、過去の『泉』と会えたに違いないと。体が動かせず見れないがそうなったに違いないと信じて目を閉じようとして――いた。

その時だった。

「お前、何やってんの？」

空気違いな笑いを含む声が泉の頭上に降りかかってきていた。重たげなまぶたを再びに開けると、目に飛び込んできたのは人間で、信じられない人物だった。明るい声を知っている、自分を見下ろしている彼のことを知っている、疑いは晴れていった。「穂摘……！」腹の底から出た精一杯の声に、明確な反応（リアクション）が返ってきているのだった。

「助けてくれてありがとうな、泉」

泉の瞳に確かに映っていた、にこやかに笑う彼の顔が。さらによく話をし出していた。

「女王はさー、もっと周りをよく見た方がいいと思う。前ばっか見てさ、ほらみろよ、車にはねられてやんのって」

くっくっく、と笑いながら意地悪そうに泉を見ていた。

「何で先輩がここにいるの……おかしい」

「おかしくないさ。開発者の気まぐれ」「はぁ？」「だってこれはゲー……ま、いいじゃんか。お前の要求を受け入れてくれたなら」

そこまで言って、泉の手をとっていた。泉には何のことなのかが全く不明だったが、握られた手は泉にとっては本物で、助け起こされてやっと意識がはっきりとしてきていた。

改めて、屈んでくれていた穂摘の顔を捉えていた。これだけ至近距離でいるのは初めてだったと、おかげで泉の胸は高鳴っていた。どきどきと鼓動を感じていながらも、出た言葉は棘のある言葉ばかりだったという。

「何で先に帰ろうとしたのよ、皆心配してたじゃない」

「何となく。泉だって、勝手にいなくなって心配かけてたじゃねーか前に。俺はその真似をしただけ、と」
「何ですって。私は関係ない」
「いーや。女王様に憧れました。女王様って素敵」
「その言い方やめてくれる。ほんとに、誰が最初に『女王』なんて……」
「退屈だろ？　強すぎて……」

言い合いの後には、穂摘からの抱擁が待っていた。すっぽりと、穂摘の両腕のなかにくるめられてしまって泉は、身動き不可能となっていた。「だからホレ。『刺激』を与えてあげないと」「ちょっ……」穂摘は、あははと大口で笑っていた。頭がおかしいのかと思いながら泉は、恥ずかしくて堪らない顔を隠すために穂摘の腕のなかへと埋まった。「ずっと泉を見てたんだよね」本当なのか嘘なのか、そんなことまで言っていた。

「危なっかしい奴だなって思ってたんだよね。前ばっかり見てる。前だけじゃなくて、後ろも隣も左も右も上下も斜めも、自分の中身も、見なくちゃいけねえんだよ、忙しくな。前向きっていうのが必ずしも良いことだけじゃないって、解る？」

傍で聞いていた泉は軋む体に耐えながらも、「……知らない」と答えていた。
「例えばさ。俺のことどう思ってた？」
泉のことなど構わず強引で、一方的でも穂摘は真剣だった。顔を上げると、穂摘は回答を待っていて泉の心臓に負担をかけていた。鼓動は激しく叩きつけ、恥ずかしいのもピークを越えていったのか、泉の突っぱねた素直でない態度や口は、ついには折れて諦めていった。
「好きだよ……たぶん」

避けてきた事柄に、今ひとたびに向き合っていた。「きっと好き……」恥ずかしそうに笑いながら。

泉にとって脅威なのか穂摘を敵視していたのには、憧れというのも含まれよう。自分にはないものを持ち合わせていた相手に対する羨望と嫉妬、大人でもない泉には、まだ『確信』するに至るには早かった。

パンパカパーパッパー。

２人の頭上で鳴ったと同時に、『安心度』が空に表示されていた。上昇した数値を見ると１００％を示しており、もう１度鳴るのかと予想がされるラッパの滑稽な音は、何故か今回はもう鳴らなかった。代わりのように流れてきたのは音楽で、時々に歌われる言語は日本語ではなく英語、つまりは洋楽をアレンジしたものだった。

それはとても心地のよいＢＧＭで。

永遠に閉じ込めておけそうなほど２人は、……幸せだった。

19（魔女の夢）／最終話

小雨は暫く降り続き、灰色の空と街と、そして幸せだった2人に潤いをと称して湿った空間をつくり出す。抱き合ったままで離れられない2人だったが、別れの時は近づいてくると感じていた。目を開けて見上げると、無の表情だった穂摘が泉に説明をしてくれていた。

「この世界の『俺』は泉のおかげで助かった。お前がしてくれた余計なことのおかげで、車に当たらずに済んだな。感謝してるぜ」

「体が勝手に飛び出しちゃった……よく覚えてないけど、過去の『泉』は何処へ行っちゃったの。よく、分からなくなっちゃって……」

残念ながら、泉は動くことができなかった。事故に遭ったせいで体が麻痺しているのかもしれなかった。体を動かせないために確認が出来ないが、『泉』の行方は穂摘がきっと教えてくれると、期待して返事を待っている。

しかし穂摘は若干、弱った顔をして、一度だけ目を伏せていた。

「過去は、変えられないんだよ、泉……」

目の奥は、真剣だった。

「え……？」

「いや。過去の『泉』とはさっき話し合って別れてきたから。車は行っちゃったな。お前が事前にしてくれた『余計なこと』のおかげで時間とタイミングがズレた。俺は車に当たらずに済んだし、お前はこんな重体になってるけど、それ以外はハッピーで済んでる。……たぶんな」

聞いた泉は安堵して、一緒になってため息が漏れていた。「良かった……」微笑みながら。

泉は気がついてはいなかった。穂摘が言っていた、『余計なこと』に。それは、泉が『泉』を現場へと急ぎ連れて行こうとした時に『接触』したことによる。このせいで時間に差は生まれ後に響き、差は伸びたのか縮んだのかは不明だが、穂摘の事故に遭うタイミングは『ズレ』て、例え過去の『泉』に呼ばれて振り返ったとしても、不幸は避けられた結果になった。

穂摘の言うことがもし本当なら過去の穂摘と『泉』は事故に遭わずに会えたはずで、ハッピーで2人は続きの人生を歩いていくのだろう。しかし忘れてはいけないのが穂摘が諭した通り、その世界は……

虚構である。

「分かってる」

きゅ、と口をつぐみ、雨粒の降り注ぐ空と穂摘を同時に見ていた。

「頭では分かってるの。穂摘はもう何処にもいないし、ここがゲームのなかだということも。それで、私は前に向かって行こうとした。これで間違いないって思ってた。でも」

目に雨が当たっている。何度も瞬きを繰り返しながら、言いたいことを吐き出していた。

「私、周りを全然見てなかったし、自分の気持ちにも気がつかなかった。気がつかないまま前に行こうとしていたんだね。何でなんだろう、何に引っ張られていたのかしら……」

首を傾げていると、「さあ。時の急流にでも飲まれたんじゃないか」と穂摘は一笑していた。

別れの時は、一刻一刻と迫ってきている。

「ひとりで行っちゃうと、自滅しちゃうのかな……」

薄れゆく意識は、これから何を迎えるのかが分からなかった。死なのか、それとも。
「ひとりで行かなきゃいいんじゃねえの」
また穂摘が笑っていた。安心なのは、変わらない。
「そうだね」
泉は眠るように、目を閉じていた。

「素敵なエンディングをありがとう……案内人さん」
知りすぎていた穂摘に、別れの挨拶をしていた。
泉は、意識が途切れていった。

県境に近づきながら、泉を乗せていた電車は終着駅に着く前の途中の駅にと静かに停車をしていた。『みなみ瓜駅ー、みなみ瓜駅ー』車内のアナウンスは、目を覚ました泉に自分の所在を教えてくれている。
「ん……」
体がずり落ちそうになり、体勢を直して座ってみてから、ここが何処だったかと記憶を探っていた。「えっと……あれ？」どうやら寝ぼけているようで、古い記憶が思うように蘇って来ず、混乱が生じている。「穂摘……あれ？　あれ……？」
すると涙が。つう、と突然に何筋も流れていったのだった。「どうして、あれ……？」拭っても拭っても、涙は止まらなかった。
仕方がないと泉が諦めかけた時に、横から声を掛けられていた。

「泉ちゃん……」声の主はクラスメイトで、泉と同じく黒いワンピースを着ており、暑そうに片手にはハンカチを持って泉のいる座席にと近寄って行った。
「実花」
「泉ちゃんも、先に帰ってきてたんだ。隣の車両で見かけてさ……」
泉の隣へと行き、「ん？　何だこれ？」と、実花と呼ばれた泉の友達は、空いた向かいの席を見て驚いていた。
お金が置いてあった。１０００円札が１枚、その上に小銭が……５００円玉が１枚、１００円玉が３枚、１０円玉が４枚。座席の上にぽつりと置いてあったという。「何なんだろ、気味が悪い……」結局、お金は駅員にと渡されて始末されていった。

夏休みが順調に終わり、休み中に猛暑のなか、焦げそうになったり軽く熱中症で騒ぎながらも、部活での練習は泉に大きな力をつけていた。
「ゲームセット！　マッチウォンバイ、野崎！」
相手の足元に狙って打ったスマッシュが鋭く決まると、審判が泉の勝利を宣言していた。ワアア……、テニスコートの周りでは、後輩たちや同級生などの観客が応援に駆けつけて、歓声と拍手で泉を称えている。コートを分断しているネットへ相手もやって来て、泉と握手をしてお互いに微笑で挨拶をしていた。「強いね、やっぱり」「ありがとう。強かった」流れていく汗を拭く間もつくらず、泉は姿勢よく相手の実力を認めていた。女王としての貫禄が充分に出てはいるが、以前のように誰も威圧で近づき難いものとは……少々、違っていたようである。
（勝った……！）

ラケットを握りしめたまま空へと高く背伸びをしていた。勝利は自信となり泉の成長の糧となるのだろう。負けた時には下へと向かず、青空へと溶けていってしまえばよい。

＞i１２６２０―１７７５＜

時の向くままに。

・・・

……『失敗修正マイライン［ＦＣＭＬ―Ｘ］（仮）』は大幅に変更をされ、『りたーん・まっち』というタイトルが付けられたものになっていた。プレイヤーの分身となるアバターを作成し、既につくられた街のなかを散策する『安全』で快適な『普通』のオンラインゲームになってしまっていた。

幻と消えたゲームとその構想は闇へと葬り去られたのかといえばそうでなく、またいずれ時代が追いついたらと隠れられるべき場所へと眠りについて、その時を待つとしている。ゲームは生きている、息を潜めて脈を打つ。開発者の熱き魂は閉じ込められて、でもやがて時代を越えて次世代に伝わっていくのだろうと思う。それは冷めない熱エネルギー、例えるものがないかと探せば、それはそう、例えるなら――

まほうびん。

>i12628<ruby><rb>1775<

</rb><rp>(</rp><rt>END</rt><rp

>)</rp></ruby>

１９（魔女の夢）／最終話（後書き）

ご読了頂き、ありがとうございました。
最終話で本編は完結ですが、おまけ番外編（コメディというかギャグ２本）があります。最後に飛ばして散ろうと思います。
この本編の執筆の間、瓜の話を書いた後『かわず瓜』という一般的でない瓜が大量にやって来たり、同級生が亡くなったりと「何だかなあ」なことが偶然か重なりましたが、未来透視しちゃったということで。
遊び心を忘れないというのがゲーム等アミューズメント系に言えることだと思いますが、開発者の根底にあるものだと思います。昔のゲームは、そういうのって隠れてあったものなんですけどね。「え？　これってバグ？　仕様？」さあね～みたく。
それでは、何書いていいやら分からんかったままに、終演です。
ありがとうございました。また何処かでお会い致しましょう☆

Ｈ２２．９．２９．　隣の工事がうるさい部屋にて　あゆみかん

リターン1・野崎泉の体内事情～こんな所でリバイバル～　（前書き）

野崎泉の後日（おまけ）談です。

リターン1・野崎泉の体内事情～こんな所でリバイバル～

野崎家の休日は、とても明るかった。電気が点いているからという意味ではない。

母親が活発的でというよりしぶとく元気で、いつまで経っても夢見がちなせいでもある。9月も終わりの日曜日、午後からが部活の泉は朝、起床できたのが9時半だった。

「おはよう……」

まだ少し呆けてはいたが、低めの声を何とか爽やかに出していた。

「おはよう！　泉ちゃん、待ってました！」温度差の激しい相手が、リビングの隣の部屋からひょっこりと電球のように眩しく明るい顔を出していた、それが泉の母親である。

「何……」

「ちょっとこっちに来なさい」

いきなりの命令だった。ランニングシャツにパンツ、肩にタオルをかけていた。泉はといえば着替えてはおらずパジャマ姿で、頭には寝癖のついた髪、ついでに頬には昨夜に読んでいた本の跡がついてしまっていた。読みかけで本の上で寝てしまったらしい。

髪を掻きながら泉は言われた通りに部屋へと入り、そして無言になった。「……」ここで再び温度差が生まれていた。この差は、埋まりそうではない。

母親はひと月程前に買ったゲーム、『燃やせ体内脂肪オリジナル国』をプレイしていたようで、途中だった。『燃やせ体内脂肪オリジナル国』とは、性別年齢身長体重ＢＭＩ（肥満度）と好きな名前や趣味などをネットオンラインで登録し冒険者になったつもりで、架空世界の場へと敵に立ち向かって奥へと進んで行って最後には国

の王子を救い出すというストーリー仕立ての脂肪燃焼ダイエットゲームになっている。それは最初に決めた期日以内に痩せて体重を減らさないと進まないようになっていたのだった。

足踏みボードと特製コントローラ『ヘルスU』が同梱されていて、ボードの上にのれば体重も分かり画面のなかでプレイヤーは自由に歩くことが出来る。アバターの作成が可能で、ゲームとは別のメーカーツールで緻密に体のパーツを上手く組み合わせて頑張れば、自分そっくりの人形（アバター）をつくることが可能だった。

世界観は無論、ファンタジー。王子の他に、姫や魔法使いや賢者、天使に悪魔に肩こりのおっさんが登場、乗り物には竜や鷲や麒麟や親切な悪玉吸い狼男を使い、奇跡とは起きるのが普通で気楽だ隠れて低燃費ごっこだ、労働するより金をくれとの中流階級平和主義者の雄叫びが洞窟から毎日聞こえてくるのだった、ああ全てはファン他事ーと、手が滑って文字の誤変換までも許してしまえる程の至極緩い浅い何だそれな内容になっていた。目指すは滅茶、苦茶、無茶仕様の完全オリジナルだった。

「……で？　私に用なの、何」

設置されていたテレビとゲーム機、付属のボードを眺めて泉は言っていた。欠伸をしながら、退屈そうにしていた。母親はお願いの眼差しと手を組んだポーズで、泉に頼みごとをしているようである。

「泉、この世界を助けて！」窓の外から中古相談と買取を促して宣伝しているトラックの威勢のよい声が聞こえていた。『壊れた、冷蔵庫、テレビ、パソコン、夢……』僅かに黒冗談を含んでいた。

一体どの世界を助けるのよと寝呆けながら泉は、正座して母親を細目で見守っていた。

「簡単よ、このボードの上に立って体重を量ってくれたらいいだけ。

それだけで世界と王子が救えるのよ」
「はぁ」
「最初に設定しておいた期日以内にダイエットを成功させないと、王子が入水しちゃってさぁ」
「はぁ……？」
「一度設定してしまうと修正がきかないし、クリア出来ないと天使が現れて『この……ドヘタレがッ！』って厳つい顔で怒られてしまうのね。天使のそんな顔を見たくないでしょ、王子ごと世界も崩壊しちゃう訳だし」

母親の説得に泉は納得がいかなかったが、とりあえず頷いておいていた。「そうだね……」意味の解らないヘルプには逆らえなかった、全然とやる気は起きてはいない。
「早くのんなさい。あんたがお母さんの代わりにボードにのってくれたらいいだけよ！　あんたの方が軽いんだから。若いっていいわねー、ぷん」
そして全然と可愛くもない母親のねだりに泉は、「それってゴマカシ……」と言いかけて「次頑張るから！　んもう、早くのっちゃって！」と言われ、仕方なくボードへと参上したのだった。ちゃっちゃかとゲームプレイの画面展開がムービーで進んでいき、最終、エンディングでもこれから迎えるのだろうか、美しいゲームメロディとともに庭園の場へと移動していった。
白の神殿から階段を伝って優雅に下りてくるのは王子の格好をしたキャラクタで、画面を睨んでいる泉たちへのもとへと近づいて来ていた。

そして、泉は驚く。王子の、その顔にである。

（ほ……）

口を『O』の形にして泉はフリーズしてしまっていた。
（穂摘……）
本人と間違えてしまうくらいにあまりにも、そっくりだったのである。王子のくせに焼けた素肌、長ったらしい髪の先は束ねて、愛想のよい顔で泉に親しく話しかけていた。
「やあ。久しぶりだね、よくここまで来たんだね、おめでとう。そしてありがとう……君のおかげで助かった」
優しげな瞳は、泉の心にズギュンと弾で撃ち抜いていた。途端に、周囲の気温が上昇したのかと思えばそれは違って泉の体内温度が上がったためにそうなっただけだった。

「君のおかげで」――『泉のおかげで助かった』。
言われて蘇ってきた記憶の欠片は、泉の熱を冷ませてくれていた。重なった記憶の彼方の穂摘は、リアルとは言い難いが本物だったと無理にでも思っていた。自分のした行動のおかげか、そのせいで穂摘が事故を免れたという事実ではない可能世界のなかで本当は生きたかった。
（私の方こそ……先輩に……）
もう会うことはないのだと思っていたのに、またこれは前向きな考え方ではなかったのだろうか、と疑問が浮かんでいた。

考えて冷静になってきていた泉に、ゲーム中の『彼』は愛想よすぎる笑顔を向けて言っている。
「凄いね、３日で２３キロも痩せたんだよ！　次は、１０キロ痩せてくれるかな？」
一気に気持ちは冷めていった。
「いや、無理だし」
どんな設定をしてたんだ実際有り得ないと思っていた。泉が返しても画面のなかの王子である彼は全く応えてはおらず、むしろ楽しんでゲームクリア後の再設定を促していた。「次に行ってみよう」

目標の体脂肪燃焼値や体重、期限を設定して下さいとゲームは要求していた。温度差は広がり切っていて絶対に埋まってはくれそうにない。

「きゃああ王子〜」

母親は興奮してゲームを再開しようとしていた。仏間に置いてある花瓶でも持ってこようか、私ではなくそれをボードにのせておいたらいいんじゃないと言い残して尻目に泉は去って行った。某大物有名漫画上では、順調に痩せていき0キロになると人が体重計の上で宙に浮くらしいが、可能世界も何処まで可能性の裾野を広げるというのか。

午後からの部活に備え、昼食後カバンにラケットと用意を終えた泉は玄関へと行きドアを開けて一歩を踏み出していた。

「行ってきます」

奥で燃焼に悶々と頑張っているのだろう母親に言ったつもりで外に出て見てみると、門の所で友達の実花が自転車を停めて泉を待っていた。穂摘が亡くなる前までは、泉と行動を共にする友達が2、3人は別にいたのだが、葬式の時に隠れて聞いてしまった『噂』のせいで今現在、泉とは疎遠になってしまっている。『冷たい』と言葉で直接に聞いてしまった泉は、友達と会いたくなくなってしまったのだった。

それを埋めるかのように。失敗修正のゲーム後、幼馴染でもあった実花が偶然に現れて、電車のなかで泣いていた泉に優しく声をかけてくれていた——言ってくれたこともあった、『泉ちゃんは、そんな冷たい子じゃないよ』と。まさに泉に大きく開いた穴を埋めてくれるかのように、存在が、強く確かなものになりつつある。

「お待たせ」

「うん。行こう」

泉も車庫から自転車を引っ張ってきて、乗ったと同時に2人は並んで学校へと向かって走っていく。
最後にゲームのなかの穂摘は言っていた、ひとりで行かなきゃいいんじゃねえの、と。簡単に言ってしまえるがそう容易くもない未来に、泉は時任せで挑むしかない。

また会えたらいいね、きっと何処かで、穂摘。
失った存在を認めながらも、生きていく。決して会えることはないと知りながらも。

泉に、前向きの戦いはまだまだ続くのである。

《リターン1／END》

リターン2・赤福太郎の結婚事情（笑）（前書き）

赤福と鈴木の後日談です。
適当に読んでやって下さい。

リターン2・赤福太郎の結婚事情（笑）

都心に近い賃貸マンション。エアコン、浴室乾燥機、追焚機能付給湯、システムキッチン、宅配ロッカー、フロントサービスまである35階建ての高級マンションに、赤福太郎という独身男は住んでいた。システム開発株式会社『ＭＡＧＩＴＥＣ』という、一応は世界を相手に市場を広げて幅をきかせてはいる大企業に、学生終業から真面目に勤めて十数年が経っていた。特別、不細工でもない彼に何故か女っ気が全くない理由を考えていったら、それは、間違いなく『性格』のせいだろうという他には……ない。

「うるせえな、このブス」

「あんたのためを思って言ってんの。早くお茶くらい出しなさい」

テーブルの上をバンバンと音を出して叩きながら、女性は赤福太郎に言い返していた。４人掛けのゆったりしたソファに美しく伸びた脚を華麗に組みながら、優雅に寛いでいた。遠慮が全くない。ネイルの装飾が蝶とマーブル模様、化粧が今流行の色でピアスは純金、髪は先日、知り合いの高級美容室でセットしてもらったばかりのセミロングカットだった。

「明日早いんだけど。早朝5時出勤。茶ぁ飲んだら帰る訳？」

赤福太郎は眠い目をこすりながら片方の手で頭を掻きむしっていた。毛質が細く針のようにストレートで、手で梳いても引っ掛かりを覚えなかった、毛ざわりが大変によい、非常に羨ましい体質を持ってはいるが、本人にはあまりこだわりがなく勝手に伸びろボケ、と適当に思っていた。

「まあそのつもりよ。朝早くからご苦労様ね。何、今そんなに忙しい訳。だったらすぐ帰るわよ、結婚報告に近くまで来たから寄っただけ」
女性がふんぞり返ってそう言うと、眠気がぶっ飛んで目を丸くした赤福太郎は夜中ではあるが大声で叫んでしまった。
「けえええええっこおおおおおおんんん！？」
何を言っているのかが判りにくかった。「うるさい、何時だと思ってんの」冷ややかな視線が飛んでいた。赤福太郎はうっかりと、手に持っていた茶筒を落としそうになりながら何とか持ちこたえていた。ぱかっとフタを開けて落ち着きを取り戻しつつあった。
「いや、だって姉貴。それでよく結婚できんだな、と……」

赤福太郎は正直だった、思ったことがつい口に出てしまう。リビングからカウンターを挟みキッチンでお茶を淹れようとしている彼だが、真っ直ぐに飛んできた灰皿をかわせず命中してしまった。カーン。灰皿は陶器ではなく空の缶製だった、そのおかげで当たった衝撃だけで済んでいる。
「あんたこそ、もう３０半ばのオッサン仲間入りいらっしゃあい、でしょ。仕事ばっかでほんっと外を見ないんだから。そろそろ身を固めたら、ってさっきから言ってんの。せめてデートくらいしてる？　この部屋見ても、なーんて簡素な空間なんだろ、ってか、キレイすぎ。曲がっているものがひとつも見つからないっていうこの不気味さ」

テレビ、パソコン、ＨＤＤレコーダー等の機器が置いてある部屋にはゴミや埃が窓のサッシにすら一切目に見つからず、角のシェルフの棚には１ミリも隙間やズレなく本やＣＤ、ＤＶＤ等がＮｏ．１から番号付きで抜かさず並べられてその続きに、『絶対空間２０ＸＸ』『曲げ戻せスプーンＥＳＰ完全版』『あるまじき男優の礎』等と、背に書かれたファイル等が収められていた、そして。

リビングを見ると、ハンガーに掛けられた上着やシャツはボタンやファスナーがあれば上部までしっかりと留められ傾かず、タオルは端から角に至るまで丸むことなくピンと伸ばされ干されていた、さらに。

壁のポスターやコルクボードに貼られたメモ用紙は絶対に斜めにならず測ったかのようにマス目に整列し。

またさらにキッチンを見ると、戸棚に仕舞われた無地の皿や小鉢やコップにもズレはなく積まれたり並べられており、コンビニで買って食べた後のフードパックは洗われて表示シールを残さず剥がされ色と形と日付順に分けられ選別されてこれもズレなく重ねられて置かれていて。

いきなり冷蔵庫を開けてみると、あるのは『バク乳』『イカの刺身』だけだった。

確かに、簡素な上に、曲がりどころか斜めにあるものさえ発見が難しい部屋である。

額を押さえてかなりの我慢をしているのだろう赤福太郎を差しおいて、姉貴と呼ばれた赤福皐月（さつき）は腕をさすって何度も「気味が悪い、あーキショイ、神経質」と受け入れ拒否を呟いていた。

うるさい早く茶を飲んで帰れと、赤福太郎の心境は穏やかとは程遠かった。

赤福太郎は思い出して、考える。昔に付き合ったことのある貴重な女性たちのことを。今ではもうとっくに音信不通で、何処にいるのか生きているのかさえも見当がつかない関心もない女性たちだった。いつからだっただろう、仕事一直線になったのは。若い学生上がりの頃はもっと遊んでいた気がするのだがと、赤福太郎は皐月を見送りながら考えていた。

皐月は最後に、「ちゃんと栄養摂りなさいよ」と世話を焼いてタ

クシーを呼び、帰って行った。走り出し小さくなってテールランプの波に消えていくだろうタクシーを目で追って、赤福太郎は自身のことを振り返っていた。

ちょうど、2ヶ月程前にひと悶着があって、人の一生についてを真剣に考えていたことがあった。なら自分はどうだったんだと今この機会を得て考えるに至る。身内である姉貴が結婚か、悪くはないさ嬉しいことなんだと思うと同時に、「そういや、苗字が変わるんだろーな……」ということを思い出して息を吐いていた。外に出て少し体を冷やしたらしく、寒さを感じていた。

赤福太郎は部屋へと戻る。迎えてくれる者は誰もおらず、皐月の言う通りに「キレイに」整理整頓され尽くしている簡素な部屋へと入って行った。火は消してはあるが、ヤカンでお湯が沸いていた。

ふと、「キレイ」に連想したのか、かつて人に言われたことを思い出していた。

『赤福君って』

『「キレイ」だけど……優しいね』

彼女だった時に言われたが、当時は特に言われても気にはしていなかった。

・・・

朝焼けは夕日にも似て、東の地平を赤く染め、高層ビルとビルの隙間から赤と青のグラデーションが伸びてきていた。時間は早朝5時35分、日の出を眺めることはなく、赤福は会社へと急ぎ足で向かっていた。

電車を乗り継ぎ徒歩も込め、入社したのは6時過ぎだった。「よ

お、いたのか鈴木。おつかれ」自分の机に鞄を置くと、先にいた社員に声を掛けていた……が。
「おはにょお～、ふくー」
腰砕けそうな程、気の抜けた声が返ってきたのだった。一番目立たない奥の日陰の席にいて机に突っ伏していたのは鈴木カナ、トンガリ帽子は被らず普通に私服を着ていただけだった。
「何て声出してんだ。うわ、隈（くま）が出来てら。笑えるぞ一生」
「嘘ーん」
赤福に指摘されて、慌てて鈴木はトイレへと向かっていた。鏡で顔を確認したのだろう、トイレから出てくると、『しょんぼり』を体で表し、がっくりと項垂れていた。
「せめてパンダだったら良かったのに……」
寝ぼけていた。
「意味がわからん。それより、何処まで進んだ？」
「あとちょっとー。バグはひと通り直したよ。後は確認待ちー」
先ほど突っ伏していた机の傍にはパソコンが1台、起動していて、書き込み掲示板が画面に表示されていた。表題に『バグ報告一覧・重要度S』と明記され、各項目ごとのチェックボックスに印が入っていた。
「そうか、もうひと息だな。徹夜ご苦労さん。これやるよ、少し手伝うか」
言いながら赤福は、自分専用パソコンの電源を入れていた。空いた手で、来た時に机に置いていた缶コーヒー『Ｋｏｂｏｓｓ』を取り、鈴木に渡そうとしていた。「さんきゅ、フク。ちょうど飲みたい時間頃。……ふふ」まぶたの上を2重にも3重にもさせながら、渡された缶のプルタブを上げてなかの飲料を一気に喉へと流し込んでいた。「ぷっはー」コーヒーの息が吐き出されると、もう一言を出している。「水分ー」
目が乾いていたらしく、体がカスカスだーとまで言っていた。ど

うやら仕事の疲れもピークに達するらしく眠気末期症状が鈴木を襲う。「そういえば缶コーヒーを開発したのって日本だっけ、ミルク入りはＵＣＣが最初だったよね。やるう、倒産せずに生き残ってるう……」段々と声が遠く小さくなっていった。

「ぐう」

「寝とけ、あとやるから」

腕を組んでいた赤福は椅子から立ち上がって、残された鈴木仕事の始末に乗り出していた。「むにゃ……」

鈴木の机でパソコン画面にカーソルを合わせてカチカチと音を出しマウスで項目をクリックしながら、横下で伏せている鈴木に「やれやれ」とも言っていた。「フク優しーねー……」消え入りそうで寝言に近く呟き鈴木は寝入っていった。「都合よくほざくんじゃねえぞ、２時間寝てろ、叩き起こす」厳しい物言いのはずが鈴木には逆効果だったようで、微かに笑いながら全く動かなくなってしまっていた。

一般に、この会社の出勤時間は午前１０時だった。ひとり残業で上司に許可をとり辺りの電気を消したなかでぽつんと、画面を睨みキーボードで字を叩いていた鈴木は、目が覚めて開けると、赤福の顎が視界に飛び込んできていた。フクが何でここにいるのー、と口に出す前に２時間前を思い出していた。

たまたま机のパソコン画面に用事があってそのような格好となった訳だが赤福は、Ｗｉｎｄｏｗｓ画面の左下に小さくある時計表示に従って読み上げていた。「８時１５分」早く起きろと言いたかったのだろう。

他の社員はまだ来ていなかった。

「ん……」

上体を起こして目をこすり、正気へと返ってきたのか、まともなことを聞いていた。

「やばい間に合わない」

両頬っぺたを潰してアッチョンブリケと吠えている。どうでもいいアクションだったがこれでも鈴木はまともだった。寝る前と変わらないのは気のせいだろう。

「もう確認終わる。ざっと目を通しとけ」

冷ややかとも言うべき赤福の顔は仕事しか考えてはいないそのものだった、鈴木はポカン、として寝ぼけの続きのような顔をしていた。

「頼りになるー」

「早くしろっての」

大げさに『尊敬』の眼差しで見つめた後は、言われた通りにしていった。

仕事を終えた後に、2人は今の内にと会社をいったん出て行った。まだ朝の9時前、他の社員が入社してくるまでには時間があった。なので、今の内に朝飯でも食べておこうと赤福が言い出して鈴木は「ほーい」と承諾していた。

鈴木のお腹がぐう、と鳴っていた。「分かりやすい奴だな」赤福は歩道を歩きながら、「おい。フラフラすんな」や「危なかしいっての、端に寄れ」や「自転車が来てるぞ……っておおい、避けろっての！」と世話を焼きっぱなしだった。飲食店が並ぶ大通りに行き着くまでに、赤福は鈴木を誘導しながら目が放せないで苦労している。鈴木は徹夜がたたってか体を重く感じているようで反応が鈍かった、放置すると大変に危険だろう。

「牛丼でいいか」「みそ汁飲みたい」「じゃあ決まり」

歩きながら凸凹コンビの2人が大手牛丼チェーン店『すきやん』をすぐ見つけるが、表の札に『まだ準備中』と書かれていて入ることが出来なかった、時計で確認すると朝の9時過ぎ、開店している所を探す手間や入社しなければならない時間を考えると、そうのんびりともいかないようである。

「あ、あそこいい感じじゃない、フク」

鈴木が指をさして示していた方向の先には、赤煉瓦造りの古ぼけた洋装で喫茶店が一軒あった。一見するとレトロな雰囲気で昔ながらの喫茶店といった感じで、ショウケースとその前には植木や手づくりの木工品などがあった。

立てかけられていた黒のメニューボードを見ると、『オムライス』『カレーライス』『ウインナコーヒー』と手書きで書かれていた。

「オムライス食べたい」「みそ汁はないぞここ、たぶん」

「卵ー」

どうやら鈴木のお腹は卵を歓迎するのに切り替えたようでいて、頻繁に「卵、卵〜」と繰り返していた。分かったから黙れと赤福は鈴木を抑えて、店内へと先に入って行った。カラン、ドアの上部角に添え付けてあったベルが来客を告げている。「いらっしゃい」太めの中年女性が、カウンターから窺うような格好で覗いていた。

「何にする」「オムライス！」

「じゃあ俺もそれで」

カウンターの傍の4人掛けテーブルについた2人は、メニューも見ずに先ほどの店員を呼び、オムライスを注文しようとしていた。すると受け付けてアイボリーのエプロンを着た中年らしきふっくらとした女性店員は、水の入ったコップと受けに入れた白のおしぼりタオルをテーブルに置いて、「ハードとマイルドが出来ますよ、お好みはどちらで？」と愛想よく聞いてきた。

「まいるど！」
「俺はハードで」「かしこまりました」
聞きつけると店員は速やかに去り、赤福は店内を落ち着いて見回していた。卓上にはおみくじ付きピーナッツ販売機やシュガーポット、レジの横には店主が運営する特殊簡易公衆電話だったピンク電話や新聞、週刊誌があり、何処からかエルビス・プレスリーの曲が聞こえてきている。
「そういえば日本の小泉元首相はプレスリーと誕生日が同じらしいな」
「へーそうなんだ。変わり者同士」
「というより、時の人」「あはははは」
おしぼりで手を拭き、水を飲みながら2人は斜め向かい合わせで、たわいない会話をしていた。水を飲みながら赤福は、「レモンが入ってるな、ここの店ちゃんと目が行き届いている」と香りながら細かく店を評価していた。2人の他には数人で、カウンターや座席にちらほらと客がいるだけだった。

数分経って運ばれてきた盛り付け皿に、鈴木がまず絶賛していた。
「にゃー、トロトロ～」頬っぺたを潰して見たままを叫んでいた。オムライスのマイルドを注文した鈴木のそれは、半熟卵にソースがかかった手づくり感とクリーミーさ全開のトロトロ系だったのである。女性客には堪らないだろう、腹ぺこの鈴木には直球ストライクだった。「うにゃあああ～」猫なで声は加速して「やかましい」と赤福に怒られていた。
一方、赤福の前には、ケチャップのチキンライスが薄い玉子焼きに包まれているオールドスタイルなオムライスが運ばれてきていた。絶対に期待を裏切らない完璧さがハードだと赤福は内心で褒め称えていた。メニュー欄には、ハードは『ハードボイルド』と表記されている。元は「堅ゆで卵」という意味らしい。
「いっただっきまーす」

もはや何も言わず赤福は先にオムライスに手をつけていた。

「鈴木」

「ん？　なあに」

トロけている白身をスプーンですくいながら、鈴木は幸せそうに顔を上げていた。

「会社に戻ったら、上に報告するけど……」

ためらいがあるのか、赤福は口ごもっていた。「うん。いいよもう、直せるとこは直したし、確認もフクがしてくれたしさ」信頼し切った顔でいた。

鈴木が発案し、幻と消えた『失敗修正マイライン［ＦＣＭＬ－Ｘ］（仮）』は名前とシステムを大幅に変更されて、従来のゲームへと市場に展開されることが決定している。そのためそのソフトは、鈴木たちによって当初予定していたものとは全く違うものにつくり変えられていた。デバッグはされ、最終的なチェックはまだこれからだが、商用として提出される手はずになっていた。

「フクってば。気にしてるの？」

鈴木の明るい顔が、少し曇りかけていた。赤福はすまなさそうに、オムライスを小分けしていた手を止めて、沈みかけた顔で俯いて、ぽつりとこぼしていた。「ごめん鈴木、力が及ばなくて」上部層とのかけ合いは、赤福たちチームの神経をすり減らすものだった。何度かこれまでに話し合いは続いていたが、技術より『ゲームによる人体への影響』という観念において絶対的に許可が下りることはなく、断念せざるを得なかったという。

こみ上げてきた感情は、赤福を饒舌にさせていた。「何が『新たなる開発をめざす』だ……」そしてもう一度鈴木に詫びていた。

「ごめんな……」

足りなかったように、もう一度吐いている。

「ごめん……」

食べかけのオムライスは、こうしている間にも冷めていくのだろう。鈴木は、それを許さなかった。

「ボクは別にオムライスが従来じゃなくたっていいんだよ。美味しいんだからさ」

どう話が脱線するのか、また話は何処へと向かって行こうとしているのか。一方的な鈴木は卵を突きながら、一口をすくって口に入れて言った。

「卵は卵で、御飯を包んでさ。姿かたちが変わっても、オムライスはオムライス。これを最初に発案して調理した人がいた時代の人の、オムライスはオムライス。変わらないよ」

「じゃあ米が麺に、鶏卵がダチョウの卵にでもなったらどうすんだよ」

「うーん。そりゃ別の名前をつけたらいいんじゃない。オムそばってあるじゃん。そんな風に、その時代の人が適当に名付けになったらいいじゃない」

鈴木は、最後のひと口を放り込んで手を合わせていた。ごっちー、と歯を見せながらお腹一杯と嬉しそうに言っていた。そして脇にあったメニューを眺めて、デザート一覧を覗いていた。

「お前はそれでいいのか、鈴木。その内に誰かが、俺たちと似たようなことをしようとして発表しても」

「いいってばさ。ゲームから戻って来れなくなったら困るもんね。そこ解決できたらいいよね。ボクたちには無理だった、なら仕方ないや。また違う方法を考えよう、限りなく本質や本物に近い体感リアリティゲーム、限界まで行きたいな……」

鈴木の見た夢は、絶望ではない。とても希望に満ちていた。

「お前は、気楽でいいよな」

赤福も食べ終えると、鈴木が手に持って見ていたデザートのメニューに目を配っていた。

「フクが固すぎるんだよ。溶けちゃえばいいのにさ、卵みたいに。考えなくても困らないことに何で時間をかけるのさ。考えなきゃいけないことって他に色々とあるでしょ。次のデザートどうしようかなあ」

鈴木は、大きく『当店おススメ』と書かれた季節フルーツ日替わりパフェに目が奪われていた。

「でもさ。フクのそんな細かい所が、安心しちゃうんだよね」

目はメニューを追っていて、鈴木は忙しいらしかった。

「今朝だって、タイムカード打ってないじゃない、ただ働きしに来ちゃってさ。心配しなくても大丈夫だよ……全く、フクってば、……優しーね」

鈴木は、店員を呼んで追加注文をしていた。

赤福は思い出していた。数ヶ月前だったか、鈴木が起こした騒動についての後片付けを。身勝手な行動に出た鈴木に、赤福は責任というものの重さを苛立ちに変えて責めたかった。しかし鈴木は無茶にも思えて、解決法を考えてはいた。それがゲーム最後のバージョンアップでプログラムを書き換えた、もしくはデータを追加した、案内人による強制終了だったのである。しかもデバッグ給料分とゲームの返金と言って、お金を置いてきたという。

「案外、案内人のこれで再帰は実現できるかもしれないよ？」「無茶すんなっての。実験するなら自分で試せ」「事故ったら助けに来てね、フク」

赤福に微笑が浮かんでいた。頼んだデザートを待っている間は楽

しそうで、そんな鈴木を見て救われているのだろうか、余裕というものが、赤福のなかに生まれていた。

しかし腕時計を見ると、文字盤の針は時刻を『９時４９分』と示している。

「……やばい、鈴木。デザートは諦めろ」

低い声で宣告は、鈴木に大打撃を与えていた。「にゃあ！？」猫、発声は再びに響き渡っていた。

「時間がない。もう行かないと……すみません、お勘定」

手を上げて、赤福は注文の強制終了（キャンセル）を申し入れていた。「しょんなぁああ～」デザート代込みで赤福が会計を済まそうと、レジへと先に向かって行った。後ろで鈴木が泣いている、赤福は振り返らなかった。

会社までの道のりで、急ぎながらも、赤福は鈴木に奇妙なことを言っていた。隣で息を弾ませ赤福の早足に追いつこうとしている鈴木の耳に、一応は届いていた。

「……候補にあげとくわ」

「え？　何なに？」

「真っ直ぐ早く歩け」

前向きな２人に、明るい未来を信じている。

《リターン２／ＥＮＤ》

＞ｉ１２６２９｜１７７５＜

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n5812n/

リターン・トゥ・マイライフ

2011年2月25日12時46分発行